DOSHISHA JIHO

同志社時報

2019.10
No.148

特集

■同志社一貫教育探求センター始動

学校法人 同志社

■……信仰を以て学校の基礎となし、学術を以て左右の翼と為し弥（いよいよ）振ひ、弥勉め、生徒諸君之主基督の為又邦家為御尽力あらん事を日夜祈居候……

「1884年10月31日　新島八重宛て書簡」／
「新島襄全集３」p305／柏木義円写

木村　良己（中学校・高等学校教諭）

■保養と募金のために出発した欧米旅行（1884.4～1885.12）のさなか、容体急変のため遺言を書き残してから僅か2ヶ月の、１８８４年10月31日付新島八重宛て書簡の一節である。アンドーヴァーのフィリップス・アカデミー英語科に入学した１８６５年10月30日から20年目に当たるこの日、奇しくも新島は同じ場所に佇み、自らの学びの原点に想いを馳せながら、同志社への想いと祈りを「…信仰を以て学校の基礎となし、学術を以て左右の翼と為し…」という言葉で、簡潔に綴っている。この言葉の直後には「…新築之家は彰栄館と称せられ候由、誠に美はしき名と存し…」と、「彰栄館」命名への喜びを語って、この書簡は締めくくられている。

■２００８年中高共用管理棟：恵潤館、高校教室棟：桑志館竣工に始まる「同志社中高統合事業：建設工事」は、既存のメディアセンター：知創館、自然科学棟：万象館に加えて、創作芸術棟：想遠館、中学教室棟：立志館、北体育館：雄飛館、チャペル・音楽・カフェテリア棟：宿志館が次々と竣工し、２０２０年冬に予定される南体育館及び付属棟竣工をもって、当面の同志社IWAKURAキャンパスの風景が完成する。その建物は「翼翔館（よくしょうかん）」と命名され、「Mysterious Hand＝見えざる御手」を意識させる「曙の翼を駆って（詩編139:10）」という旧約の言葉と共に上記新島の想いと祈りが込められ、その空間で躍動する未来を生きる生徒たちの心に必ずや受け継がれることだろう。

法　人

『一貫教育探求センター始動』2019年６月26日

同志社創立150周年が目前に迫った2019年４月、法人内各学校の教学連携をより強固にするために「同志社一貫教育探求センター」が発足しました。
2019年６月26日(土)には関連シンポジウムを開催。センター所長の千田二郎教授をはじめ、法人内諸学校の代表者が講演を行いました。変わりゆく社会の中、学校法人同志社としてどのような教育を目指していくべきか？本誌「特集」にて詳しく掲載しています。

大　学

『宇宙生体医工学研究プロジェクト　キックオフシンポジウムを開催！』2019年６月１日

2019年６月１日(土)同志社大学今出川キャンパスにて、同志社大学宇宙生体医工学研究プロジェクト　キックオフシンポジウム「新時代を切り拓く、宇宙への挑戦」を開催しました。京都大学宇宙総合学研究ユニット特定教授で元宇宙飛行士の土井隆雄先生、国立研究開発法人宇宙航空研究開発機構の金井宣茂宇宙飛行士に講演をいただいたほか、国内外から多数の有識者を迎え、世界の宇宙医学研究について討論を実施しました。会場には、小学生からシニアの方々までの約550名が来場、宇宙研究についての関心の高さと期待がうかがえました。詳細は本誌「レクチャー」にて掲載しています。

女子大学

『食物栄養科学科科目「京の料理と菓子」に留学生が参加』

2019年6月13日

日本語集中講座(JLIC: Japanese Language Immersion Course)に参加中の留学生３名(台湾１名、フィリピン２名)が、食物栄養科学科食物科学専攻科目「京の料理と菓子」の授業に参加しました。
当日は、享和元(1801)年創業という京都の老舗料理旅館「近又」の総料理長を講師にお迎えして、「魚料理」をテーマにした授業を実施。総料理長が、「魚の調理法」「美味しさを決める要因」などについてお話しをされたあと、鱧(ハモ)の骨切り、鯛の３枚卸しなどの実演を行ってください、留学生たちは驚きの表情で見つめていました。

中学校・高等学校

『高校生徒会』

2019年４月22日

グレイスチャペルにて、高校１年生・新執行委員募集のアピール

香里中学校・高等学校

2019年度 春のオープンキャンパス

2019年5月6日、6月9日

穏やかな天候に恵まれ、春のオープンキャンパスを開催いたしました。
両日とも大勢の見学者を迎え、体験授業は15授業、クラブ体験はほぼすべてのクラブで行い、香真館では生徒による社会科研究発表、英語スピーキング発表も開催し、来校者には大変喜ばれ無事に終了できました。

開会礼拝

英語のヒアリング授業

社会科研究発表

ダンス部クラブ体験

女子中学校・高等学校

『遠足』

2019年5月9日

中学２年生以上の学年別遠足を行いました。行先は、中２：宇治市植物公園・友愛の丘、中３：東映太秦映画村、高１：信楽陶芸村、高２：海遊館、高３：伊賀の里もくもくファームです。天候にも恵まれ、体験や見学を通じてクラスの仲間と親睦を深めるよい機会となりました。

国際中学校・高等学校

『高校球技大会』

2019年6月13日

はじめて、ドッジボールでの高校生球技大会を開催した。学年別６クラス対抗で午前中の予選リーグ後、午後は決勝戦、順位決定戦を行った。

『日本文化の日』

2019年6月26日

日本文化の一端に触れるため、生徒会主催で実施している行事。一日の学校生活を浴衣で過ごし、七夕を体験した。また、昼休みには縁日を楽しんだ。

小学校

『避難訓練』

2019年５月20日

２校時開始後に家庭科室から火事が発生し、燃え広がったとの想定で避難訓練を実施しました。今年から新たに用意した防災キャップをかぶり、先生の指示に従って速やかにグランドに避難することができました。

国際学院

国際部：『Field Trip to Toyooka City』

2019年5月15日～5月17日

Grade 4/5 visited Toyooka City in connection with their learning about How the World Works. The trip provided opportunities for the students to engage in hands on activities to transform kinetic, solar and biomass energy into other usable forms.

初等部：『4年生宿泊学習 ～美山・宮津～』

2019年6月18日～6月21日

4年生は、美山・宮津に宿泊学習に行きました。美山では、京都大学芦生研究林で由良川の水源地を訪ねるトレッキングツアーに参加しました。宮津では、天橋立で地引網体験を行いました。自然の中で充実した4日間をすごしました。

幼稚園

『校祖墓参』

2019年５月17日

年中・年長組が新島襄先生のお墓の前で礼拝を行いました。子どもたちは滑りそうになったり汗だくになりながらも、一歩一歩自分の力で若王子の山を登りきり、お墓の周りの落ち葉などをみんなできれいに掃除して、心静かに祈りの時を持ちました。お天気にも恵まれ、新島先生が子どもたちの来訪を喜んで下さっているかのようでした。

『七夕発表会』

2019年７月６日

栄光館のファウラーチャペルにて、七夕発表会を行いました。クラスごとに歌や劇・オペレッタなどを披露し最後は全園児で歌を歌いました。緊張しながらも友だちと一緒に頑張ることができ、大きな成長が見られました。今回は同志社女子大学と同志社女子中学校・高等学校のご厚意によりまして、保護者の方々も広々とした所でゆったりと子どもたちの姿を見られて喜んでおられました。

インタビューの2人

INTERVIEW

私の志

（本文4〜7頁）

川北円佳さん

1993年、奈良県生まれ。2016年同志社女子大学現代社会学部社会システム学科卒業。山口朝日放送を経て、2018年テレビ大阪入社。2019年8月現在の担当番組は、「やさしいニュース」（月〜金 午後4時40分〜）、「おとな旅あるき旅」（土曜夕方6時30分〜）、「名門！モウカリマッカー学園」（金曜深夜1時40分〜）：ナレーション担当）など。座右の銘は、笑う門には福来る！大学では茶道部に所属、京都学生ガイド協会で観光案内に励む。趣味は、テニス、ピアノ、御朱印集め。パワーの源はお肉！

誰にでもわかりやすく情報を伝える。何事にも挑戦し反省を活かして、一歩ずつ成長していきたい。視聴者からもスタッフからも信頼されるアナウンサーを目指します。

松本卓也さん

1985年生まれ。大阪府出身。大学卒業後、電機メーカーでの社会人経験を経て、2011年より徳島県上勝町に移り住む。「百年続く町づくり」を合い言葉に、「上勝町を五感で感じられる」をコンセプトにしたカフェ「ボールスター」の経営を中心に、地域活性化に取り組む。2019年春からは、徳島大学人と地域共創センター、地域共創コーディネーターとして就任。活動領域を広げ、大学と地域との連携型学習、「コミュニティベースドラーニングの構築に取り組む。大学時代はAESECに所属し、国際的な政治・経済問題についての興味関心が強かった。それが今は人口1,500人、高齢化率50%の小さな町を拠点としている。人生は何が起こるかわからないが、だからこそ面白い。

私が暮らす上勝町のゴミ分別数は、なんと「45」。大変でしょうと言われますが、大変だからこそ人は考えます。面倒だからこそ、どんなものを買うべきか、どんな生活をすべきかを見直すきっかけになります。ゴミを減らす世界への、一歩です。

同志社時報

No. 148

2019.10

目 次

〈表　紙〉
彰栄館
中谷隆志（大学国際教育インスティテュート事務長）

〈表紙裏〉
新島　襄の言葉
木村良己
（中学校・高等学校教諭）

〈口　絵〉
■法人　一貫教育探求センター始動
■大学　宇宙生体医工学研究プロジェクト　キックオフシンポジウムを開催！
■女子大学　食物栄養科学科科目「京の料理と菓子」に留学生が参加
■中学校・高等学校　高校生徒会
■香里中学校・高等学校　2019年度 春のオープンキャンパス
■女子中学校・高等学校　遠足
■国際中学校・高等学校　高校球技大会／日本文化の日
■小学校　避難訓練
■国際学院　国際部：Field Trip to Toyooka City／初等部：4年生宿泊学習 〜美山・宮津〜
■幼稚園　校祖墓参／七夕発表会

「私の志」インタビューの2人

INTERVIEW
私の志
やさしいニュースを体現　川北円佳さん　4
知って欲しいことを視聴者の目線で伝えたい。
地域の力をつないで生かす　松本卓也さん　6
自分の暮らしを自分で創る。上勝町から世界への挑戦。

特集
座談会　同志社一貫教育探求センター始動　圓月勝博／戸田光宣／石川博三／千田二郎　8
シンポジウム
同志社の一貫教育に想うこと　千田　二郎　17

レクチャー
宇宙生体医工学研究プロジェクト　キックオフシンポジウム
「新時代を切り拓く、宇宙への挑戦 "Space-DREAM Project"」　22

建物案内　医心館（同志社大学）　29
建物案内　南体育館（同志社中学校・高等学校）　30
同志社の逸品　ギュツラフ訳聖書『約翰福音之傳』　同志社社史資料センター　31

同志社ナウ

オープンキャンパス２０１９開催　大学入学センター　33
「ガーデニングボランティア」　小﨑　眞　34
「数学甲子園」にチャレンジしました！　園田　毅　35
緊急地震速報受信システムの設置　～高校生徒自治会からの提案～　加藤　憲　36
写真クラブの歴史と活躍　古谷　直子　37

私の研究・私の授業

キャリアのけもの道　浦坂　純子　38
子育てへの不安が生んだ研究　荒渡　良　40
デジタル・ヒューマニティーズの潮流　河瀬　彰宏　42
非行・犯罪行動変化と回復を支える　毛利　真弓　44
英語のアポロジー（謝罪）についての研究と教育　北尾　キャスリーン　46
ホンモノから学ぶ社会科の学習　金山　香織　48

同志社クローズ・アップ

世界で活躍できる人材を育てる法学部の授業
―「グローバルな法律実務家」の育成を目指して　川嶋　四郎　50
学部横断型ＰＢＬ科目「プロジェクト科目」成果報告会を開催　大学今出川校地教務課　52
ワンダフル・エイジング　日下菜穂子　54

美術鑑賞授業の実践
「生活の中のデザイン〜色々な椅子〜」 ―― 塩田　侑佳　56
理科系クラブ研究発表会 ―― 古本　大　58
スキー学舎 ―― 平岡　隆一　60
SCHOLARS OF THE WORLD, UNITE! ―― Simon GODDARD WEEDON　63

特別寄稿

前川道介氏の「言葉」 ―― 澤田　瞳子　64

新刊紹介

新島襄の教え子たち（ジャンル別）・本井康博著／「通貨」の正体・浜矩子著／信託法をひもとく・佐久間毅著／現代韓国を生きる若者の自立と親子の戦略―文化と経済の中の親子関係―・尹鈔喜著／詩画制作論の系譜・伊達立晶著／大統領とハリウッド―アメリカ政治と映画の百年―・村田晃嗣著／アベノミクスの成否・佐竹光彦他編著・北坂真一・川口章・三好博昭他著／グローバル研究開発人材の育成とマネジメント―知識移転とイノベーションの分析―・宮本大他著／ハーモニー探究の歴史―思想としての和声理論―・大愛崇晴他著／50年目の「大学解体」20年後の大学再生―高等教育政策をめぐる知の貧困を越えて―・佐藤郁哉編・他著／近代日本のメディア議員―「政治のメディア化」の歴史社会学―・河崎吉紀他編著／サイレント・マジョリティとは誰か―フィールドから学ぶ地域社会学―・鬱田竜蔵他著／朝鮮半島 危機から対話へ―変動する東アジアの地政図―・太田修他著／いま、教育と教育学を問い直す―教育哲学は何を究明し、何を展望するか―・小野文生他著／芥川龍之介選 英米怪異・幻想譚・藤井光他訳／認知症と医療・日下菜穂子他著　66

●本誌では学校法人同志社の各学校名から「同志社」を省略して、左記のとおり表記しています。
大学＝同志社大学、女子大学＝同志社女子大学、中学校・高等学校＝同志社中学校・高等学校、香里中学校・高等学校＝同志社香里中学校・高等学校、女子中学校・高等学校＝同志社女子中学校・高等学校、国際中学校・高等学校＝同志社国際中学校・高等学校、小学校＝同志社小学校、国際学院初等部・国際学院国際部＝同志社国際学院初等部・同志社国際学院国際部、幼稚園＝同志社幼稚園

●執筆者等の役職・職位は2019年10月1日現在、大学広報課が把握している範囲で表示しています。

やさしいニュースを体現

知って欲しいことを視聴者の目線で伝えたい。

平日の夕方、テレビ大阪のスタジオからニュースを届ける。番組のコンセプトは高齢者や子どもにも分かりやすく伝えること。言葉の一つひとつに心を砕くお仕事ぶりなどを伺いました。

川北円佳（かわきたまどか）さん
アナウンサー

司会やリポーターの経験が言葉を扱う仕事への関心に

――大学時代はどのように過ごされましたか。

川北　進学を考えていた時は公務員志望で、法学や地方創生などに関心がありました。現代社会学部は経営学、法学、国際学など学びの幅が広く、将来の進路に役立つと思ったので決めました。印象深いのは大西秀之先生のゼミです。ファッションやメイク、「おひとり様」ビジネスなど身近な事柄から社会問題までグループディスカッションを行いました。たとえば「おひとり様」では、新しいビジネスが生まれている一方、孤独死問題もある。物事の正面だけでなく裏側に潜む事柄や少数意見を傾聴することで真理が追究されることを学びました。報道で大切な多角的視点は、学生時代に培われたと思います。

――アナウンサーを志した経緯を教えてください。

川北　人前で話すことを初めて意識したのは高校時代です。軽音楽部の演奏会で司会したとき、先輩から「アナウンサーみたいだね」とほめていただいたことが、頭の片隅に残っていました。大学で徐々に進路を真剣に考え始めてキャリアサポートセンターを訪ねたところ、同志社女子大学出身のアナウンサーがおられることを知り、私も目指してみようかなと思ったのが始まりです。びわこ放送で高校野球のリポーターを務めたこともあります。大変な仕事でしたが、やりがいが大きく、もっとうまく話せるようになりたいという気持ちが強くなりました。3年次からはアナウンススクールに通ったり、テレビ局のアナウンスセミナーにも参加したりしました。

――京都の観光ガイドもされましたね。

川北　京都学生ガイド協会に4年間所属して、主に小・中学校の修学旅行生を案内していました。歴史を理解してもらうために絵本を作るなど、工夫も重ねました。ガイドの経験も、言葉を使った仕事への関心を深めたと思います。

――念願叶って山口朝日放送に入社されました。

川北　十数社を受けた中、内定をいただいた時は本当に嬉しかったです。仕事はアナウンサー業務だけでなく、企画、取材、構成、編集と多岐に渡り、一連の番組制作の流れを学べたことは貴重な財産になっています。昨年、ご縁があってテレビ大阪に入社、関西に戻ってきました。

「誰にもわかりやすく」を大切にしたい

――テレビ大阪でのお仕事ぶりをお聞かせください。

川北　「やさしいニュース」のキャスターをはじめとして生放送が多く、毎日が刺激的です。特に生中継でリポートする際は、適切な表現で伝えられるよう、下調べを入念に行い、現場で聴いた生の情報も取り入れます。時には百を調べても、実際に使うのは一くらい。でも残りの九十九も、決して無駄にはなりません。自分の知識や興味が広がっていきますし、思いがけないところで役立つこともあります。

――報道について心がけている姿勢はありますか。

川北　「やさしいニュース」の中で「きょうの気になる！」という約3分間の解説コーナーがあります。短時間のコーナーだけに言葉選びは慎重に行い、内容を自分の中にしっかり落とし込むよう努めています。その結果めりはりの効いた、「伝わる」内容になるのだと思います。報道で心がけているのは、常に中立の立場でいること、聞き手を不快にさせないことです。その上で少しでも世の中がよくなる方向をむいて伝えられたらと、常に緊張感の中で考えています。ニュースにはいろいろな見方があるので、自分なりの切り口や意見を持つことは重要です。でもアナウンサーの仕事は、まず正確に伝えること。その上で将来的には、自分の意見も盛り込めるようなキャスターになれればと考えています。

――アナウンサーという職業の魅力を教えてください。

川北　取材を通して話題の人など、たくさんの方に出会えることです。普通なら行けない場所にも行けることも。最前線に直接触れられる醍醐味があります。

――ナレーションもしておられますね。

川北　「おとな旅あるき旅」という旅番組や「モウカリマッカー学園」というバラエティ番組を担当しています。最初の頃、ナレーションは苦手でした。「ただの音読、中身が伝わってこない」という指摘を受けて、悩んだ時期もありますが、今は、内容を理解したうえで、「演じる」ことに重点を置いています。特に大切にしているのは、視聴者にとって心地よい「間（ま）」。言い換えればテンポであり、リズムです。高校時代の軽音楽部での活動が役立っているのかもしれません。

――将来取り組んでみたい仕事はありますか。

川北　音楽やスポーツが好きなので音楽番組やスポーツ取材に取り組んでみたいですね。どのようなジャンルでも、「川北がいてよかった」と言っていただけるような仕事を重ねていきたいです。第三者の視点から現場を俯瞰し、作り手の思いと視聴者目線がずれないようにわかりやすく伝えられたらと思っています。

――今年チャレンジしたいことは。

川北　防災士資格です。南海トラフ地震がいつ起きるかわかりませんし、防災・減災に関する知識を習得することは大切だと考えています。

――座右の銘があれば教えてください。

川北　「笑う門には福来たる」です。テレビ大阪には〝明るい〟枠で採用されたと聞いていますから（笑）。あとは「人事を尽くして天命を待つ」と、リンカーンの「意志あるところに道は開ける」。アナウンサーへの道もテレビの仕事も、強い意志とブレない心で自分なりにやるべきことをしてきました。今後も、掲げた目標を達成するためにチャレンジし続けていきたいと思います。（２０１９年７月31日、大阪にて）

地域の力をつないで生かす

自分の暮らしを自分で創る。上勝町から世界への挑戦。

松本卓也（まつもとたくや）さん
地域共創コーディネーター

妻のふるさと徳島県上勝町に二人で移住、そこで結婚。「ゼロ・ウェイスト（ゴミゼロ）政策」を推進する町に共鳴しながら、地産地消型のカフェ経営や産官学コーディネートなどを通して地域共創に取り組む卒業生です。

都会暮らしに疑問を感じ 妻の故郷へ二人で移住

――移住の決め手をお聞かせください。

松本　卒業後東京でメーカーに勤務していましたが、自分の生活をどこか宙ぶらりんに感じていました。東京では誰かのコントロール下でしか生きていけない。自分の暮らしを自分でデザインしたい。そんな思いが地域創生への関心を育てたのだと思います。故郷の上勝町のための活動を考えていた妻を支えたいという気持ちも、もちろんありました。そこへ起きたのが2011年の東日本大震災です。同世代が次々と行動を起こすのを見て、「自分も」と決心しました。

――けれど、ご自身にはゆかりのない町です。どのようにモチベーションを育てたのですか。

松本　移住した頃、上勝町で開かれた、景観を考えるセミナーに参加しました。終了後、あるおじいさんが「家の前の花壇が荒れているから、明日からきれいにしよう」とおっしゃった。自分の当たり前の暮らしに手をかけて守っていこうとする人たちがいる。何歳になっても未来を考えて行動できる人がいることに、大きな勇気をもらいました。それが私にとって上勝町での原体験になり、この町に息づくマインドを大切にしていきたいと思わせてくれました。当時既に上勝町はゴミゼロ政策や「葉っぱ（つまもの）ビジネス」などで注目を集めていたので、世界から人が訪れる町になっていました。地域に寛容性が生まれていたことも、私のような移住者の活動の助けになったと思います。

――移住2年後に、ご夫妻で素敵なカフェを地元にオープンされました。

松本　「上勝町を五感で感じる」がコンセプトでした。その頃から、他にもカフェやイタリアンレストラン、廃材を使ったビール工場などが同時多発的に生まれていきました。この動きが波になり、さらに大きな渦としていけるよう、貢献できればと思っています。

――今年4月からは徳島大学にお勤めです。お仕事について教えてください。

松本　上勝でできたこともあるし、上勝だけではできなかったこともあります。そこでもっと活動の幅を広げて勉強したくなり、徳島大学・人と地域共創センターのコーディネーター・特別助教に応募しました。現在は地域の活性化を実践的に進めています。目立った事業としては、これは私の着任以前から続いている取り組みですが、徳島大学のキャンパスでファーマーズマーケットを地域の方と共に

運営したり、小松島市の街づくりプロジェクト「こまつしまリビングラボ」に加わったり。よくある一過性のイベント作りではなく、住民や自治体、企業など地域の多様なプレイヤーを巻き込み、継続して地域の未来を共に築いていくプロジェクト作りができるように、意識しています。

地域創生のカギは危機感の共有と住民参画

——地域創生がうまく進んでいる町と、そうでない町があると思います。差は何だとお考えですか。

松本　危機感を本当に感じているかどうかの違いかなと思います。上勝町がゴミゼロ政策を本気で推進したのは、切羽詰まったからでした。町が焼却炉を2基購入した直後、2000年にダイオキシン類対策特別措置法が施行され、排ガス基準をクリアできなくて使えなくなった。もう新しい焼却炉を買うお金はありません。だからゴミを減らすしかなかったのです。葉っぱビジネスも、主力作物だったミカンが台風で大打撃を受けたことが始まりでした。今では年収が一千万円を超える高齢者もおられます。お歳を召しても皆さん忙しく、こちらが元気をもらってばかりです。

——そこまで危機感が共有されていない地域では、何が成功へのカギですか。

松本　よく「課題解決型ビジネス」と呼ばれますが、「課題解決」と言っているうちは「やらされている感」があると思います。それだけで自発的に動く人は限られている。そこに「楽しくできる」要素が加わるといいですよね。さらに言えば、そんなことをしなくても回っていける仕組みづくりが一番重要でしょう。

——一人ひとりが加わることが大切。

松本　つい先日、研修でアメリカのポートランドに行きました。全米で「住みたい街ナンバーワン」に選ばれた都市です。現地では当局が住民の意見も丹念にすくいながら、街のビジョンを1年半かけてじっくり作ったそうです。そうすれば後で市長や役人が交代しても簡単には覆せません。日本ではなかなか難しい手法ですが、非常に勉強になりました。

——町づくりで大切にされていることは何ですか。

松本　コーディネーターという役は、よくファシリテーションで終わってしまう場合が多いです。私はそれだけでなく、自分も実行主体の一員として関わっていきたい。そして人とのつながりを大切にしながら、未来のことを共に考えたい。他大学では、私と同じような役割に「連携」コーディネーターという名前がついていることが多いですが、徳島大学は「共創」コーディネーターです。これは、つながるだけではなく、共に何を創るかに重きを置いているという大学の強い想いがあります。

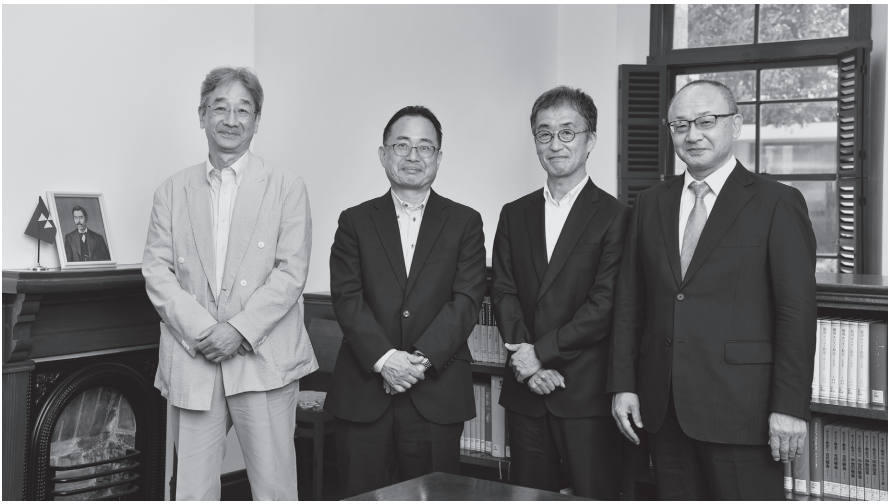
——未来につながる、新しい志は育ちましたか。

松本　小さな町では、実現の難しいことは確かに多いです。でも、できない理由を考えて心配するよりも、未来につながることを考えて行動したいものです。たとえばゴミゼロ政策において、上勝町のリサイクル率は約80％にまで向上しています。しかし残りの20％はおむつなど、どうしても分別の困難な物です。この20％をゼロにするため、上勝からどんな仲間を作り、世界へムーブメントを起こしていけるかというやり甲斐が生まれています。今は立場上いったんカフェなどの運営から離れていますが、今後もあまり枠にはまるつもりはありません。移住して8年が経ちました、上勝というバックグラウンドが私を生かしてくれている。恩返しと言っては恥ずかしいですが、私にできることをしていきたいと思います。

（2019年8月19日、徳島市にて）

同志社
一貫教育探求センター始動

「基督主義ノ学校ハ幼稚園ヨリ大学ニ至ル迄実ニ必要ノモノト信スレドモ、当時我輩ノ力　尚微々タリ、尽ク之ニ着手シ得サルベシ」と述べた創立者の新島襄。2006年の同志社小学校の開校により、新島そして同志社の悲願であった、幼稚園から大学・大学院にいたる一貫教育体制は確立された。そして、創立150周年が目前に迫った2019年、法人内各校の教学連携をより強固にするために「同志社一貫教育探求センター」が発足。今回は、センター設立の背景や目標、課題などを紹介しつつ、14の学校を擁する同志社が、今後どのように一貫教育を展開していくかを探る。



●出席者

圓月勝博（えんげつかつひろ）　（一貫教育探求センター運営委員、大学文学部教授）

戸田光宣（とだみつのぶ）　（一貫教育探求センター運営委員、国際中学校・高等学校校長）

石川博三（いしかわひろみ）　（小学校副校長）

●司会

千田二郎（せんだじろう）　（一貫教育探求センター所長、大学理工学部教授）

「苦き水を甘くする木」を育てるのが同志社の教育

千田●２０１９年４月に一貫教育探求センターが発足しました。本日は設立の背景などを紹介し、総合学園同志社が今後どのように一貫教育を結実させていくべきかなど、課題を探る場にしたいと思います。まず新島は、どのような人物育成を目標としていたとお考えですか。

圓月●イギリスのキリスト教詩人ミルトンの代表作「失楽園」に次の一節があります。「良心とは神が一人ひとりに与えたアンパイアである」。人が自分自身を判断できる力が良心であると。またプロテスタンティズムには「万人祭司」という考えがあります。各自が自身の教師であり、自分を導く。それが良心教育の根底にあって自治自立を重んじる同志社の教育が生まれ、個人と個人が向き合うという意味での国際主義が生まれた。現在の学習指導要領では「学力の三要素」が重視されています。知識・技能、思考力・判断力・表現力、主体性・多様性・協働性の三つです。新島の建学の精神はそれらをすべて含んでいます。正しいことは何かを知っている知識、それを行える技能、自分で考え判断して人に伝えていく力。何より社会の中でそれを実践していく主体性と協働性が既に含まれている。この学力観を１５０年近く前に先取りしていた新島先生の見識を生かし、力を合わせて同志社教育を発展させていきたいものです。

戸田●中高では全員が参加して礼拝を行いますので、我々が教育の根幹としているキリスト教に直に触れる機会が与えられています。そして新島先生の生き方を授業で学ぶ中で、生徒たちはキリスト教主義・自由主義・国際主義を学ぶ。三つの建学の精神によって、各中高はしっかりと結ばれていると思います。国際中高で大事にしているのは「倜儻不羈（てきとうふき）」という言葉です。少々角があってもしっかりと自分自身を持っている人間を育てていきたいという思いは、新島先生以来、脈々と受け継がれているのではと思います。

千田●倜儻不羈を現代風に言うなら、個性を伸ばして、画一的ではない、総合的な教養人を育てようということですね。

石川●良心の意味を考えるとき、共に生き、互いに知ることが大事であろうと考えます。依存し合うのではなく、自立した自分として生きながら、共に生き、相手をよく知る。そういう人間関係を含めた教育を考えています。新島が最初の卒業式で語った言葉に「まず隗より始めよ」があります。君たちこそが私の跡を継いで日本を変えていくのだという信念を新島は持っていた。また新島は、出エジプト記の一節も話したと言われます。奴隷として囚われていたイスラエルの民をモーゼが率い、エジプトを脱出した。食べ物がなくなり水がなくなり、やっとたどり着いた所にも苦い水しかなく、皆が不満を持った。そこでモーゼが神に祈り、一本の木を入れると水が甘くなった。新

圓月　勝博
一貫教育探求センター運営委員、大学文学部教授

島は「あなたたちが出ていく社会は苦き水である。しかしそこで不満を言うのではなく、あなたたちこそがそれを甘い水に変えるのだ」と言った。人を信じ、自分から何かを行う人になってほしいと。私たちもそういうことを小学生たちに伝えていきたいと思います。

千田●小学生に理解を深めさせるために、どのような工夫をしていますか。

石川●子どもなので感覚や空気を大事にします。新島の足跡を雰囲気として感じさせていく教育です。たとえば宿泊体験学習や遠足。6年生と1年生は4月に同志社墓地への遠足を行います。6年生が1年生の世話をしながら、墓地に眠る人たちのことを教えてあげます。4年生は山中湖に行った後、安中を訪ねて新島を感じます。新島は実際には2週間しか安中に住んでいませんが、帰国後に寺でキリスト教を伝え、それを人々が受け入れた話もします。5年生は函館を訪れ、海外渡航碑前で祈りを捧げる。6年生はアーモストやボストンへ行き、新島が祈った教会など多くの場所を訪ねます。

千田●その教育が、どのように実を結んでいくでしょうか。

石川●5年生のクラスに、手を挙げられるようになった女の子がいました。「自分が間違うと、友だちがそれは間違っていると教えてくれるからだ」と言う。間違いを咎められると人は自信をなくしますが、クラスメートは咎めるのではなく、きちんと指摘してくれた。共に生きることが助けになった例です。これが新島の求めていた生き方ではないでしょうか。

千田●そのような新島先生の教育に基づいて設立されたのが一貫教育探求センターです。設立の背景を圓月先生から少しご紹介いただけますか。

圓月●私はこれまで一貫教育委員会の長を務めていました。社会状況の変化に対し、さらに新しい形で、同志社全体としての対応が必要になってきました。そのキーワードの一つが「Society 5.0」。「超スマート社会」とも言います。あるいは国連で採択されたＳＤＧｓなどの未来社会のイメージに同志社はどう対応していくのかという課題から、法人内の新たな連携についての検討を行ってきました。

千田●第4次産業革命と言われる時代、このパラダイムシフトに対応できる人材を育てるには、大学側も学問体系をもっと広い視野で見直す必要がありますし、小中高ともそのような教育や危機感を共有させていただきたいということですね。Society 5.0については、具体的にどんな取り組みが必要なのでしょうか。

圓月●ＩＣＴやＡＩの活用が大きな課題です。これにはツールの整備とコンテンツの開拓という二つの側面があります。ツールとしては文科省の委託事業「JAPAN e-Portfolio」のように、電子ポートフォリオなどの開発に同志社は近年、協力校として関わっています。中高ではキャリアパスポートなど、いろいろな形が来年以降は必須になってくるでしょう。JAPAN e-Portfolioは小学校から高校までの学びの記録をつけていき、大学へつなげることが目的です。これらポートフォリオ・ツールの一貫教育への利用は、将来的に大きな可能性があるのではないでしょうか。個人データの集積に限らず、ビッグデータとしても使えるので、同志社の児童・生徒・学生全体をよく把握し理解する体制づくりへの活用が

期待できます。また現代は「文理融合」もキーワード。大学でもデータサイエンス教育の必修化を検討するなど、コンテンツ開発が進行中です。小中高でもＩＣＴ教育、ＡＩ教育など新しい教科内容を開発していく必要がある。ただし文科省のひな型どおりにするのではなく、同志社らしい活用法を考えたい。探求センターで研究していただきたいと思います。

千田●そのようなプラクティカルなコンテンツと同時に、探求型教育や想像力を引き出す教育も必要でありましょう。ディスカッションしながら考えさせる教育を、アメリカのボーディングスクールでは非常に重視しています。

圓月●持続可能な社会を構築できる人材を育成するためのプログラムづくりですね。そのための持続可能な一貫教育体制を、皆でつくっていきましょう。

一貫教育のメリットとは

千田●ありがとうございます。ここで一貫教育のメリットを確認しておきましょう。先ほど、学力の三要素の話がありました。その三要素を一貫教育に当てはめ、教育の重点化を図ることが重要かと思います。一つ目の知識・技能の習得については、小中高はそれぞれのカリキュラムで最低限の共有を図っていただき、次の教育段階へ渡していただきたい。大学・女子大はその上に専門教育の高度化を進めます。各レベルで役割分担を行いましょう。二番目の思考力・判断力・表現力の教育は小中高で重点化していただきたい。大学レベルでは遅いのが実情です。三番目の主体性・多様性・協働性は、まさに幼稚園から大学まで一貫教育の縦の中で取り組むべきでしょう。大学では新島塾を開催していますが、そこでもたとえば統合知など、知識ではなく知恵や想像力を発揮する人材の育成を考えています。それが一貫教育のメリットかと思います。皆さんはどうお考えですか。

圓月●Society 5.0を代表とするような社会状況の中では、知識の賞味期限が非常に短くなっています。数年で意味がなくなる細かい知識・技能より、もっと深い知恵を養っていくことが大事です。現在の大学改革の柱は高大接続の改善と入試改革です。1点刻みのテストをやめ、目先の知識に振り回されない若者を育てることが入試改革の一つの趣旨です。その意味で同志社は先見の明がある。今は公立でも一貫教育が行われるようになりましたが、それらとの違いを我々はどう打ち出していくのか。思考力や主体性などは育成に時間がかかります。ともするとすぐに成果を求めがちな考え方から脱皮し、3年、6年、あるいは12年計画で力を養っていけるのが一貫教育のメリットでしょう。教育のあり方を、もっと大きく考えるべきです。一貫教育のデメリットは一つずつ解消しながら、先輩方の残してくれた大きなレガシーを育てていくことが大事だと思います。

戸田●メリット、デメリットは「プラスアルファ」と考えるとよいと思います。

戸田　光宣
一貫教育探求センター運営委員、国際中学校・高等学校校長

中高の現場では学習指導要領に従って教育をしていますが、それは1点刻みの授業です。確実に知識・技能を習得していき、その上で総合力を持った子どもを育てていきたいのですが、我々の今のカリキュラムでは困難なのです。わかりやすい例を挙げると、SDGsを授業で取り上げたのは、国際高校におけるスーパーグローバルハイスクールの正規カリキュラムにプラスアルファされた1時間でした。そこで持続可能社会の問題をどう考えるかという問いを投げかけるのが1年生のプログラム。それを生徒が持ち帰り、さらに追求したければ2年生で選択する。そういう基本的知識のインプットとアウトプットをギリギリの時間内で消化していかなければならない厳しさがある。学力の三要素を我々がしっかり受け止めた上で、できることをプラスする。その中で大学や小中高との交流を考えたいと思います。地球的問題を探求する生徒は、内部進学者が非常に多いです。フィールドワークでドイツに行った時も、内部進学者は現地の生徒に積極的に質問していました。1点、2点という数字に現れない共通点を、そこに感じます。一人でできることは限られているから、一人ではできない部分をグループで共有し合う。これも推薦で来ている子どもたちは非常によく行っています。小学校や国際学院初等部の教育の成果だと思います。

千田●それが「協働性」ですね。

持続可能な一貫教育の仕組みづくりを探る

圓月●このように現場で感じておられることを共有するためには、その活動を可視化する必要がありますね。それも探求センターの役割の一つでしょう。

千田●今の現場での課題を大学側も認識し可視化して、必要なことは法人として取り組む決断をしないといけない。一方で中高にしてみれば、考える生徒を育てる教育が大学への推薦制度に反映されているのかという問題もあるでしょう。現在のシステムでは困難なのであれば、そういう学生を英才教育したり、考える学生を育てる特別なコースがあったりしてもいい。教員同士の交流も必要です。小中高の先生が大学に来てさまざまな教科で連携したり、職員にも、もっと人的交流があったりしてよいと思います。

圓月●過去に少し交流はありましたが、ややもすると上から下への連携になってしまうんですね。大学が高校に要求し、高校は中学に要求するというような一方通行ではいけない。下から上への要望もあってよい。こんな学生を大学で評価してほしいなど、高校から要求してもいい。双方向性が今後の課題です。

石川●小学校では大学や中高からご協力をいただき、学生や元裁判官の卒業生などが模擬裁判をして児童を参加させてくださったり、フォーミュラーカーを走らせていただいたりしています。私たちの教育を通して、先輩たちの熱い思いも伝わっていく。同志社ならではの素敵な一

石川　博三
小学校副校長

貫教育かと思います。

戸田●中高から送り出した生徒が大学で研究を深め、教員として戻ってきてくれるのは本当にありがたいです。そういう子たちがまた同志社をつないでいく。それは我々が完結した教育をしたのではなく、大学だけでの教育の成果でもない。

圓月●それが持続可能な一貫教育。

千田●それが常態化しないと、アイデンティティを継承できない。

石川●小学校には、同志社の卒業生が大勢、教員として戻ってきています。他の一貫教育校ではたとえば中学2年生までの授業が小学校6年生で終わるなど、先取り教育が一貫教育であるというようなケースが多いのですが、同志社は違います。新島の思いや建学の精神に基づき、各年齢でどのような教育をしていくかを絶えず問うていくのが同志社の一貫教育ではないでしょうか。この思いを伝えたいから、同志社に戻ってくれるのだと思います。主体性の教育で言えば、あなたはどんな志ですか、どう生きますかを問うことだと思います。志が正しいのであれば失敗も認め、その過程を含めて結果が出るのを見守る。そういう度量の広さが同志社教育でしょう。

千田●探求型教育はどう進めていけばよいでしょうか。

石川●小学校では、探求と発表をセットにして実践しています。自分が知ったことを人に伝え、それを聞いた人もまた視野が広がり、他の人に伝えたくなるものです。

内部進学の最適化を進める

千田●失敗する勇気は、よい経験になりますね。日本は用心が過ぎる社会。一貫教育があるのだから、もっと自分に制限をかけない、情熱的な学生が育ってほしい。そういう人材こそがこれからの社会変革に耐えられるのだと思います。次は各校の内部進学状況をお聞かせください。

戸田●4高校から大学へ進む生徒は85％程度で推移しています。現在同志社大学は非常に数多く学部展開をしていますので、生徒のニーズがそこに収まっているのが大きな特徴です。医歯系・建築系の志望者や国公立のキャリアを求める生徒は外部受験をしますが、それ以外の生徒は自分のやりたいことが、ある程度同志社の中で充足できている。小学校から大学までの一貫教育のシステムが充分機能しています。

石川●小学校では卒業生90名の大多数は法人内中学校に進学します。各校いずれも同志社の一貫校でありながら、独自の伝統やカリキュラムの特色があります。それらを考えながら進学先を選べる点について、保護者からの評価は非常に高いです。

圓月●大学側では、推薦入試でも学力を厳格に評価するよう強く求められる時代です。内部の生徒を落とすためではなく、必要な学力目標を設定し、そこに向かって教育を行うのが趣旨です。妥当な学力目標を十分に話し合いながら進学先の選択を進めていきたいと思います。推薦制度では時折ミスマッチングと思えるケースがあります。ミスマッチングはゼロにはならないでしょうが、できるだけゼロに近づけることが大事です。最近は、女子大学と大学とで情報をできるだけ共有するよう努めています。大学にない学部を女子大学はたくさんお持ちなので、最

適な大学の学部に最適な生徒を送り出すのが目的です。そういう意味では各学校間のハードルをできるだけ下げて情報を共有し、ウインウインの関係を作っていくことが大事かと思います。

法人各校間の連携を強固にし教職員の交流や生徒・学生の支援制度を充実させる

千田●法人各校間の具体的な連携についてはいかがでしょうか。

戸田●4校の中高の合同説明会を大学で開かせていただいています。将来このキャンパスで過ごせることを強調した上で、その前の6年間や3年間をどこでどう過ごしたいですかと問いかけます。将来をイメージできる点は、受験生募集にとって非常に大きな力になります。大学の先生や学生に自分の研究を提示していただくなどできれば、さらにいいですね。

千田●その点をまだ誰も、一貫教育の中で俯瞰して追求していません。たとえば有名教員が単発ではなく長期の講座をして単位認定するということもアピールになるでしょうし、フィリップスアカデミーのスーパーエリートコースのような課程を中高に作ってもいい。小中高大をつなぐ縦のカリキュラムの構築を、もっと活性化する必要があります。

圓月●法人が一つにならないといけません。かつての一貫教育推進委員会を引き継いで、今の一貫教育委員会があります。前組織の課題として、縦の連携はいいが、上意下達式になると下の方から徐々に不満が出てきたと仄聞しています。だから、縦においても何でも言い合えるフラットな関係が必要です。それでこそ同じ教育者として分かり合え、上下関係ではない協調路線が築けるのではないか。そこで現在の一貫教育委員会が注力しているのが研修交流会です。

戸田●研修交流会に加えて、授業公開もしようという動きがありますね。今までは互いの授業を見る機会すらなかったので、ありがたいです。

圓月●近年、中学入試の重要度が非常に増している点もポイントでしょう。大学では、18歳人口の減少が話題になっていますが、そのファースト・ウェーブは既に中学入試に大きな影響を与えています。今、法人の力をそこに結集しないといけない。中学校が安定すれば、6年後に大学もその恩恵を受けることになる。また、中学校に魅力があれば、小学校にも魅力を感じてくださる方が増える。

千田●同志社にあまり興味を持っていない方には魅力をどう知らせていきますか。

圓月●倜儻不羈という言葉は私も好きですが、パソコンで変換できない、知らない人が読めないという欠点があります。同志社にまだ接点のない人にもわかってもらえるわかりやすい新たな言葉で同志社の魅力を発信し、新しい同志社ファンを作ることも考える必要があります。持続可能という視点で言えば、新しい血とエネルギーを外からも入れ続けないといけないでしょう。

千田●もっと危機感が欲しいですね。

石川●全体を俯瞰してアドバイスをくださり、共に発信できるような体制ができるといいですね。

千田●法人の広報活動もさらに活発化させる必要があります。それも含めて一貫教育探求センターでは、取り組むべき具体策を6点掲げています。1．各校が実

践する研修会の積極的支援　2．教員の自主的研究会の支援　3．課外活動・スポーツ支援を含む指導や顕彰制度のサポートと充実　4．留学制度による国際的な人物養成システムの検討　5．法人広報の強化　6．生徒と教職員が世界を視野に入れ活躍できる基盤の作成です。1については社会変革の専門家を呼び、大学を含めて教職員を対象としたシンポジウムみたいなものを行ってもいい。4については、たとえばフィリップスアカデミーへの留学制度も検討中です。これらの課題のために、さらに人材の交流ができればと思います。

圓月●3のスポーツ支援にも注目したい。トップアスリートの育成だけでなく、知徳体の全人教育という観点から検討したい。国際的に見て一流の大学や高校は、やはりスポーツ支援が充実しています。

千田●アメリカのアイビー・リーグの「アイビー」には、文武両道の人材を養成するという意味もあると聞きます。同志社の小中高でもそのような、全人格的な学生を育てていただければ。

圓月●最近はパラスポーツも注目されているように、ダイバーシティの問題もある。小中高には他人との違いを認め合う教育を望みます。たとえば香里高校のダンス部は実に素晴らしいです。プロのコーチを迎えず、自分たちでプログラムや振り付けをしている点も見事です。そういう部分も発信できれば同志社全体にとっても大きな力になる。バブリーダンスで別の高校が注目を浴びていますが、今年の全国高校ダンス部選手権では香里が1位ですから、もっと大きな声で自慢しましょう。

石川●課外活動においても同志社の一貫教育の中で子どもたちを育てることができればと思います。

千田●まさに探求センターの運営委員会で、その点を議論中です。センター名で

千田　二郎
一貫教育探求センター所長、
大学理工学部教授

大学側から小中高に対して、どんなスポーツ支援が必要かというアンケートを取っているところです。それによって学生同士の交流なども進めばと思います。

圓月●4の留学制度については、Society 5.0とグローバリゼーションの視点は欠かせません。留学自体が目的なのではなく、その結果優れた人材を国際的に輩出してこそ意味があります。たとえばTOEFLなどの高得点者は大学入学1年目から協定大学に留学できるような、グローバル化推進制度があるとよいのでは。就職活動の日程も厳しいので、海外に出るなら2年次までがいい。そのあたりの情報交換を行い、新しいニーズに応えられる制度を作りたいですね。

千田●中高4校とカリフォルニア・ヌエバ校との交流プログラムに代わるようなものも考えたい。法人として対外的にアピールするよう、できる生徒をもっと積極的に海外へ送り出したい。優秀な生徒、能力のある生徒には、たとえば土曜の午後に授業を追加してもいい。それを、大学入学後に学科の概論の単位として充当することも考えてよいのではと思います。

圓月●我々はよく「落ちこぼれ」の話をしますが、「浮きこぼれ」の若者に活躍の場を与える方法も考えたい。それでこそ教育は面白いのです。

千田●一貫教育だけにとらわれず、各校での活動情報を共有したいと思います。何かご要望があれば、私やセンターまでどうぞお伝えください。最後に今後の展望についてご意見があればお願いします。

戸田●生徒が減っていく危機感を、中高は露骨に感じています。絶対的な倫理観としてのキリスト教主義教育は絶対に揺るがないと思います。国際主義も揺るがない。そして皆が、あらゆるものから自由であろうとしている。この同志社の魅力をどこに言いにいけばよいのかわからなかったが、探求センターと一貫教育委員会の存在は本当に心強い。法人全体で力をつけていきたいと思いました。

石川●同志社は中で固まって仲良しに見えて、外から入りにくい雰囲気があるようです。同志社の門は皆さんに開いていることを、ぜひ法人の広報から発信してください。

千田●一貫教育委員会が大学の窓口になっていますが、中高の法人としての窓口も、もっと機能させないといけませんね。

石川●保護者面接をすると、共通するものを感じます。人とつながり、協働しようという方が多い。だから子弟を同志社に行かせようと思ったとおっしゃいます。それは同志社教育を受けた卒業生たちによる、一つの成果ではないでしょうか。

圓月●そういう方たちを大事にしていかないといけませんね。それが一番の持続可能性につながると思います。

千田●本日は有意義なご意見をいただき、誠にありがとうございました。

シンポジウム
同志社の一貫教育に想うこと

学校法人同志社　同志社一貫教育探求センター所長／大学理工学部エネルギー機械工学科教授　千田二郎（せんだじろう）

一貫教育推進の経緯

私は学内高校から同志社大学に進み、大学院（修士・博士）を修了後、一度、企業の研究所に勤めた後、１９９０年に大学に着任しました。２００４年以降、同志社大学のエネルギー変換研究センター長、総合情報センター所長、理工学研究所所長を務めるなど、学内の業務に多く携わってきました。最近ではプロジェクト科目、リーディング大学院プログラムのＧＲＭ（グローバル・リソース・マネージメント）、ALL DOSHISHA教育プログラム、文部科学省の卓越大学院プログラムにも関わっています。同志社創立１３０周年記念写真集『鼓動』の制作にも携わり、アメリカのアーモスト大学、ジョンソンチャペルなど新島襄の足跡も訪ねました。昨年から松岡大学長が塾長となって「新島塾」が開講されましたが、私も２００４年頃から「第二の新島襄養成プラン」を提言していたところです。このように、同志社を深く愛する一人です。

中高の教育に関しましては、個人的な興味から『アメリカのスーパーエリート教育』という本を以前に読みました。アメリカのボーディングスクール、つまり寮制学校について非常に詳細に書かれた本です。特にミドルスクールにおける広範囲な教育内容に驚かされます。一般的な教科以外にも、歴史／社会／経済教育、哲学／宗教／倫理教育、芸術／文化教育、社会奉仕教育における考えさせる教育を徹底していて、思考力、想像力、判断力を養う教育がされているようです。大学進学指導では学生の情熱、熱意が非常に重要視されています。著者の主観的意見も多々ありますが、詳細で示唆に富む内容なので、興味のある方はぜひご一読ください（特に第13章「科目教育現場」）。

同志社の一貫教育について、私が今まで関与してきたものをご紹介します。２００２年５月に大谷實前総長が「一貫教育の理念の明確化と具体化」「中高大連携への取り組みの提案」「学内高校から大学・女子大学各学部への推薦制度の改善」「各方策の実施体制の検討」という４項目の諮問をされ、深田三徳教授が委員長となって一貫教育推進委員会が発足しました。私は幹事として参加しました。２００３年２月の答申では、２つの委員会の設置と所管事務組織の設置を提言しました。一つは中高大の教育連携委員会の設置です。中高大のカリキュラム連携、共通教材の開発、教員と授業の交流、特化精鋭授業、資格試験への対応、大学・女子大学への飛び入学という、５つの事項を検討するための委員会で、法人内各学校の意見を尊重しながら、学校間の連携・協力のあり方について協議をし、新たな計画を実施していこうという場です。もう一つは推薦制度委員会。各校の意見を調整・議論する機関がないなどの理由から、推薦入学についての諸問題に関する意見交換の場が必要であろうという提言でした。

これら二つの委員会が実際に動き出して、２００４年３月に教育連携委員会からは、主に法人内推薦学生の学力・意欲の向上と中高大の教育交流についての提言がありました。推薦制度委員会からは、推薦入学制度を含む一貫教育についての検討を目的とした常設委員会の設置、各学部の推薦受け入れ人数の見直し、学校間の情報交換の活発化、学力不足の生徒への対処という４項目が答申されました。これらを受けて、圓月勝博教授が中心となって同志社一貫教育委員会が設置され、現在、縦の連携についての議論が行われているところです。

さて、今の同志社において、一貫教育の現状はどうでしょうか。同志社という総合学園であるのに、幼稚園から女子大学・大学までを貫く、真に一貫教育的なスキームの議論は行われているでしょうか。たとえば英語については、法人内の英語教育の総合化、つまり「同志社の英語」を一貫教育の中で社会に対して明示的にアピールできているでしょうか。それが個人的には疑問でした。学校法人としては縦横の連携が必須なのですが、同志社では各学校の独立性が強く保たれてきた中、一貫教育の実がなかなか上がっていないのが現状ではないでしょうか。私は批判するつもりはありません。この状況を皆さんと共有し、一貫教育について議論し、強固に発展させたいという想いです。八田英二総長・理事長は「同志社諸学校と教職員を支援し、教学連携を強固にし、『フロントライン同志社』を一貫教育の面でも推し進めたい」という熱い想いを持っておられます。それを受けて、一貫教育探求センターは発足しました。縦の連携は一貫教育委員会で行われていますので、本センターでは法人内各学校の、特に教科、課外活動、スポーツ活動を活性化するための横の連携を重視した制度設計などを重点的に検討したいと考えています。

パラダイムシフトの時代を生きるために必要な改革

一方、現代の社会状況はどうでしょうか。

現在の社会は第４次産業革命と呼ばれ、

低炭素社会、持続可能な社会の設計が必要な段階です。産業界ではLife Cycle Assessment、自動車業界ではWell to Wheel、つまり油井から車輪までという言い方をするように、ものづくりにおいてエネルギーの投入量／排出CO2の算定は、今や当たり前です。原発、電気自動車、燃料電池自動車などの稼働時ゼロエミッションの例も含めて、環境への影響と起源材料の資源量、廃棄やリサイクルなどのプロセスが常に議論されています。また、情報化も進展の一途をたどり、AIやデータ解析の技術は日進月歩しています。

私の専門は機械工学→熱工学→噴霧燃焼工学ですが、新しいエネルギーデザインや都市設計なども研究しています。いろいろな街づくりに関与して思うのは、部分最適の時代は終わり、これからは全体最適の時代であるということです。つまり、持続可能な社会の創生です。国連は17のグローバル目標などを「持続可能な開発目標（SDGs）」として導入しています。車両交通分野でも、今は「所有」から「利用」へという時代です。

今後、社会状況はさらにどう変化するでしょうか。社会情勢、業種・業態、産業構造は大きく変わり、非常に大きなパラダイムシフトの時代に入っていきます。この危機感を皆さんと共有したい。21世紀の社会に対応するためには総合学的なセンスや、リベラルアーツを含めた理系的な考え方が重要であろうと思います。しかも街づくり関連プロジェクトに携わる中で実感するのは、自然科学だけでは、もはや成り立たないということです。社会科学、人文科学を加えた三位一体の総合力が必要です。大きな意味でのシビルエンジニアリングです。そういう人材を育てる教育を、我々は今までなかなか行ってきませんでした。そこで私は、カリフォルニア大学アーバイン校と提携してSustainable International Instituteの設置を検討したり、関西文化学術研究都市（けいはんな）での「けいはんな広域連携大学院」の設立構想を提案したりしてきました。長期的な展望としては、女子大学・大学でも新たな研究分野の再構築、再配置などが必要になるでしょう。AIは、予測はできるが新たな創造はできません。創造するのは人間です。変わりゆく社会や産業への対応力を持ち、複合領域や境界領域において新たな発想と創造を可能とする、知恵を持つ人材を育成しましょう。広い学問を学び教養を持ち、専門分野も卓越した、発想力／思考力／判断力のある人材を育成する教育を、危機感を持って進めていければと思います。

そういう教育を一貫教育の中で推進したいのです。小中高においては人格教育を含む総合的な教養教育をさらに重要視して、その上に女子大学・大学・大学院での専門教育を積み重ねる。アメリカのボーディングスクールでは、世界の人類・宗教・文化、エネルギー・資源問題、工学倫理、法哲学から中東情勢まで、時の政府・政治・財界に左右されない、真に必要な教育が行われています。新島襄が官立学校の設置の申し出を断ったのはなぜでしょうか。自由な学問・研究の場として私立学校を設立したかったからです。パラダイムシフトの時代に我々は、校祖の想いに改めて立ち返る必要があるのではないでしょうか。

一貫教育のメリットは、受験にとらわれずに個性を伸ばし、画一的ではない、総合的で全人格的な教養を持った人材を育てられる点です。これまでも女子大学・大学は学内各学校からの学生に期待してきました。実際、優秀な学生は多いです。一方で、大学側でもさまざまな改革が必要です。法人内各学校の教職員の皆さんと危機感を共有しながら縦横に連携を図り、運命共同体としてベクトルを合わせ、同じ志のもとで同志社教育をつくり上げていく必要があります。きれいごと・理想論とのご批判もあろうかと思いますが、何事にも好奇心と情熱を持つ学生、想像力と知恵を発揮してこれからの社会変革をディレクトでき、自分にリミットをかけない学生の育成をベースとした、共存共栄のスキームを考えていかなければならない。それを我々法人の一貫教育探求センターがお手伝いしていければと思っています。一貫教育推進に必要な最適な解はありません。できるところから我々がまず、情熱を持って始めるしかありません。とにかく、波動の原点を作りたいというのが私の想いです。

一貫教育探求センターの6つの具体策

一貫教育探求センターとしての具体的な取り組みとしては、次の6項目を考えています。一つ目は教育効果向上のための、各種研修会の開催と支援です。既に各学校教職員の方々が実践しておられますので、これを法人としてもオフィシャルにサポートして、活性化のお役に立てればと考えています。二つ目は、一貫教育に関わる教員の各教科の自主的研究会の支援です。これをさらに制度として強化していきたい。各学校の教育内容の共有化と特異化、高度化を議論した上で、共通部分の共有化を図りたい。既に行っておられると思いますが、同志社ならではの教材の開発などもあってよいと思います。これら二つは横の連携に関するものです。

三つ目は、園児・児童・生徒・学生の人格形成に資する課外活動・スポーツ支援を含む指導や顕彰制度を、法人がさらにサポートして充実させることです。四つ目は法人内留学制度による、同志社ならではの国際的な人物養成システムの検討です。これら二つは縦の連携です。五つ目は同志社ブランドを幅広く周知する法人広報の強化、六つ目が、園児・児童・生徒・学生や教職員が世界を視野に入れて活躍できるようになるための基盤を作ることです。それが、同志社をフロントラインへと導くことになろうかと思います。

また、女子大学・大学による、高校生向けの特化精鋭授業の連続講座の開設なども考えています。今まで単発では行われていますが、これを連続的に行い、単位認定などもできないか検討したい。一貫教育ならではのシステムだと思います。

これらの課題をセンターで検討していきたいと考えています。皆さんのご理解とご協力をお願いします。

（講演Ⅰ）
「『宇宙生体医工学』を利用した健康寿命の延伸を目指す統合的研究基盤と国際的連携拠点」

文理融合型の全学的プロジェクト

超高齢社会を迎えたわが国では、加齢性筋肉減弱症（サルコペニア）や骨粗鬆症など、運動器障害によるロコモーティブシンドロームの増加が見られます。また身体の不活動やエネルギー消費のアンバランスにより、糖尿病等を発症するメタボリックシンドロームも増加しています。これらの予防と改善のためには、食物、生活環境の改善、運動療法等が挙げられますが、本プロジェクトでは宇宙環境を利用します。加齢現象は宇宙環境で加速して現れます。この環境を利用して、身体諸機能の低下が起こる原因の解明とその対処法を構築することにより、人が運動しながら健康に長生きをする健康寿命や運動寿命の延伸を実現するのが本プロジェクトの目的です。

本プロジェクトは、理工学、生命医科学、スポーツ健康科学、脳科学など、人の健康に関する科学分野の統合的な研究を目指しています。たとえば生理学、生化学、神経科学など動物実験を中心とした医療系の研究から得られる知見を元に、模擬宇宙環境における人間の運動解析による知見なども組み合わせて、リハビリテーション機器や新しい運動療法の開発を行い、社会への還元を図る。さらに、それらの道具を、うまく利用者のモチベーションを維持しながら役立てていただくためには、社会科学からの視点も必要です。また、宇宙を取り巻く研究には新たな倫理問題も生じるでしょう。そこで同志社大学の建学の精神である良心教育を生かし、倫理観を持ってこのような研究に取り組める人材を輩出し、社会に還元したい。このような文理融合型の視点

宇宙生体医工学研究
プロジェクト代表
辻内伸好 理工学部教授

レクチャー

宇宙生体医工学研究プロジェクト　キックオフシンポジウム

「新時代を切り拓く、宇宙への挑戦 “Space-DREAM Project”」

も取り入れながら、プロジェクトを推進していく予定です。

抗重力筋活動などを中心とした各学問領域における実験

生理学グループでは、宇宙環境下での抗重力筋について研究します。ロコモーティブシンドロームの最大の原因は抗重力筋活動が低下・抑圧される点にあります。宇宙環境では、この抗重力筋活動の低下や高齢者のサルコペニアのような状態が加速されて観測されます。そこでラットやマウスを使って実験を行い、重力レベルに応じた発育や老化、日常生活における抗重力筋の張力発揮、運動神経活動や代謝活性レベルが抗重力筋、脳・運動神経の可塑性に及ぼす影響などを追究します。

生化学グループでは、メタボリックシンドロームや再生医療に関する研究を行います。抗重力筋などの骨格筋は、脂肪組織の代謝と相互に関係すると言われます。筋肉の萎縮はメタボリックシンドロームやサルコペニア肥満に関係します。脂肪由来の幹細胞はヒトの脂肪組織から容易に分離できるため、再生医療のツールとしても利用可能であるとして世界的にも注目されています。そこでこのグループでは、脂肪由来の幹細胞の分化に与える抗重力筋活動の抑制や過重力、微小重力環境の影響を研究することで、メタボリックシンドロームの原因追究あるいは再生医療への応用を目指しています。

神経科学グループでは、マウスを使い、抗重力筋活動の抑制や運動が脳や神経系に及ぼす影響、つまり身体の機能と脳機能との相互作用を解明します。

生体医工学グループでは、生理学、生化学、神経科学の各グループが解明したマウスなどによる研究の結果を、宇宙環境を模擬できるような手段を用いながら、ヒトに作用する影響として観察します。その結果を宇宙飛行士の訓練あるいは高齢者のサルコペニア予防、アスリートの能力強化などにつなげようと考えています。産業化の具体例としては、自走式トレッドミルやサルコペニア予防装置の開発を考えています。私はこのグループのリーダーを務めていますので、少し詳しくご紹介しましょう。

火星での活動も想定して下肢を鍛える装置を開発

たとえば微小重力は、骨と筋肉にどのような影響を与えるのでしょうか。軌道上に滞在していると筋肉が衰え、骨からカルシウムが溶け出します。これは地上での長期間の寝たきりと、まったく同じ状態です。また、特に下肢の筋肉に萎縮が目立ちます。筋肉が落ちると骨に働く力が失われます。すると骨はどんどん細くなります。カルシウムが流れ出すために尿結石を起こす可能性もあります。こ

のように非常に深刻な問題が、宇宙飛行士にも発生します。したがって宇宙ステーション内では、1日に約2時間の運動が義務付けられています。それにもかかわらず、ＩＳＳ（国際宇宙ステーション）で活動したアメリカの宇宙飛行士15人を調査したところ、筋力は20～30％減少し、骨密度もすべての骨で5％以上低下したという結果が出ました。骨密度については、8カ月で20％減少した例も報告されています。防止策として、ＩＳＳにはトレッドミル、エルゴメーター、ペンギンスーツなどの体力維持装置が設置されています。ＡＲＥＤという、1台で29種のエクササイズができる多機能装置もあります。ここで飛行士たちは毎日トレーニングを行っています。

サルコペニアは無重力状態で加速されて現れるため、それを防止するために、私たちは足首を曲げ伸ばしする運動に着目しています。ふくらはぎの部分は腓腹筋とヒラメ筋とで構成されています。腓腹筋は膝関節と足首の二つにまたがるため二関節筋と呼ばれますが、ヒラメ筋はその奥の骨に近い部分にあり、膝関節には作用しない単関節筋です。ヒラメ筋に刺激を与えようと思うと足首を動かさないといけないのですが、宇宙の無重力空間では鉄棒にぶら下がった時と同じ状態になるため、足首は下向きにだらりと落ちます。

そこで反重力トレッドミルを使い、普通に歩行した場合と体を浮き気味にして歩行した場合とを比較しました。すると、明らかに荷重を少なくするほど浮き足気味になり、緩やかなつま先歩行に近づいていくことが分かりました。また下半身の歩行動作特性は、体重の40％と60％の間で有意に変化することが判明しました。月の重力は地球の16％、火星の重力は地球の38％です。果たして火星では、地球と同じように歩けるのでしょうか。ＮＡＳＡはActive Response Gravity Offload Systemという装置があり、学生たちも現地に同行して低重力環境での歩行体験をしました。月の重力を再現した状況では歩こうとしても飛び跳ねてしまいますが、火星の重力では歩行が可能でした。しかし火星に行くには非常に狭い空間に座ったままで約6カ月かかりますし、向こうで1年作業をして、帰還にはまた6カ月かかります。火星でちゃんと歩いて活動できるようにするためには、座っている間に足首を動かしてくれるコンパクトなデバイスが必要であろうと考えています。

そこで抗重力筋のヒラメ筋や腓腹筋を効率的に鍛えるために開発しようとしているのが、自分の力で蹴り出せる負荷制御型トレッドミルです。従来型のトレッ

ドミルはベルトが自動的に流れていくため、足は前に出すだけで済みます。私たちのトレッドミルは自分の足で蹴らないと動きません。一定の負荷をかけると少しアシストしてくれるような形で動く、電動自転車のようなものです。

このように本プロジェクトでは国際的なセンターとも手をつなぐことにより、研究をインターナショナルに進めていきます。そして学生の教育にプロジェクトを積極的に展開することによって彼らの研究意欲の向上を図り、宇宙と生体医工学に興味を持つ学生の育成に注力してまいります。本プロジェクトへのご支援をよろしくお願い申し上げます。

（講演2）「健康長寿のヒントは宇宙にある」

宇宙ステーションでの生活

宇宙は一度行ったほうがいいです。行かなければ分からないことがたくさんあります。私はソユーズ宇宙船に乗って2017年12月に打ち上げられ、2日後にISSとドッキングして6カ月の滞在を経験しました。もっとも最近、ISSで宇宙活動を行った飛行士です。医師でもあります。自身が宇宙医学の研究をしているわけではありませんが、現場を見てきた貴重な体験を、本日は皆さんとシェアできればと思います。

国立研究開発法人宇宙航空研究開発機構（JAXA） 宇宙飛行士
金井宣茂 氏

ISSは現在唯一の、地球外にある人間の生活環境です。6人の宇宙飛行士がそれぞれ6カ月滞在し、世界標準時で生活しています。宇宙飛行士が生活しているキャビンと呼ばれる場所は観光バスほどの大きさの部屋が6、7つ連なっており、狭いという感覚はあまりありません。ISSは地球の軌道上400㎞を凄いスピードで飛んでおり、90分で地球を一周します。遠心力と重力が釣り合うことによって無重力環境が生まれ、その閉鎖環境に滞在しながら多彩な実験や作業を行いました。空気は地球上と同じ環境で、水は再生利用します。作業で出た汚水も液体の排泄物もまとめてリサイクルして、飲用可能なレベルにします。私たちは1週間に5・5日勤務して、土・日曜は休み。飛行士が就寝中でも、地上の管制センターが100％サポートしています。緊急時には数時間で地球に帰還可能です。

宇宙へ行く前にはさまざまな準備を行いました。特に心配されるのは、宇宙へ行くと免疫力が弱まるとされている点です。ISSに病原菌を持ち込まないようにするため、ロケットに乗る直前2週間、飛行士は検疫隔離されます。無重力を模擬して船外活動訓練を水中で行ったり、宇宙カプセルが不時着した場合に備えて森の中でサバイバル訓練を行ったりもしました。他にも宇宙酔いへの備えや、上半身にたくさんの血液が回るようになる状態に慣れる練習なども行いました。生活の訓練はそれほど特別に行わなかったのですが、宇宙へ行ってみて、人間にはその適応能力がすでに備わっていることを感じました。実際の宇宙では、思ったほど大きな問題は起きませんでした。宇宙は非常に快適で楽しいところです。体

の変化もそれほど実感しませんでした。

宇宙食は非常に美味しかったです。保存食品の味は非常に向上していますし、各国の宇宙食が食べられるので飽きません。電熱ヒーターで温めて鮭フレーク入りのおにぎりも食べられるし、冷蔵庫もあります。残念ながら今の技術ではアルコールは飲めませんが、補給船が新鮮な野菜や果物を届けてくれました。洗髪は水無しシャンプーを使用。就寝時は寝袋に入って固定されます。よく眠れ、睡眠時間が短くても非常にリフレッシュできました。

健康管理にも注意します。簡単な医療キットがあるので、何か問題が起きても地上のドクターと協力しながら治療が可能です。船内では宇宙放射線モニターで放射線を調べ、クルーも各自で線量計を持ち、データを取っていました。精神心理支援も行われます。週末に皆で最新の映画を見たり、楽器を奏でたりして、楽しみや彩りを添えます。生活の知恵を駆使して元気に暮らしました。宇宙バドミントン大会も行ない、ちなみに私は世界初のスペース・チャンピオンになりました（笑）。

ただ、宇宙へ行くと骨や筋力が弱るため、生理対策が必要でした。大掛かりな筋トレマシンがあり、毎日2～2・5時間トレーニングを行いました。将来火星に行くとき、小さな宇宙船の中で大きなトレーニングマシンは使えませんので、ぜひ同志社の先生にはコンパクトなマシンを開発していただきたいと思います。

帰還時はクルーの乗ったカプセルが切り離されて地上に着陸します。帰還後は重力環境への再適応が必要でした。1Gから0Gへの適応は割と楽でしたが、逆はなかなか困難でした。すぐリハビリが始まり、1週間から10日かけて地球上の生活に慣れていきました。めまいは24～48時間くらいで治まり、10日くらい経過した段階で、自動車の運転ができるくらいに回復しました。船内トレーニングのおかげもあって骨や筋肉は大丈夫でしたが、バランスがおかしくなるのです。よたよたとしか歩けないため、赤ちゃんが歩き出すときの体の使い方を思い出すような過程が宇宙飛行士のリハビリでした。このようなノウハウは医療に活用できるのではないかと思います。

宇宙でのミッション

ISSでは多くのミッションを実施しました。船内では高品質タンパク質を作る実験、アルツハイマー病や糖尿病の原因と言われるアミロイド線維の形成メカニズムを調べる実験など、多くの実験を行いました。他にも10センチ角くらいの超小型衛星を「きぼう」から放出したり、

将来宇宙船で使うような多様な材料を実験アダプターに付けて船外に曝露したり。

「アジアン・トライ・ゼロG」は、アジアの学生たちから簡易的な物理実験アイデアを募り、選定されたテーマを「きぼう」内で行うプロジェクトです。日本の学生から寄せられたアイデアからは、紙バネの動きに関する実験などが採用されました。宇宙空間で紙はバネのようになるのではと考え、らせん状に切った紙の動きを観察する実験です。他にも水球の中に油を注入して二重球ができるかどうかを調べる実験、ブーメランがどのような軌道を描くかを調べる実験など、若い方たちの斬新な提案は非常に面白いものでした。

船外活動も行わせていただきました。宇宙服の中は0・3気圧という低い気圧なので、潜水病予防のために3～4時間かけて体を慣らす必要があります。そのため一度船外に出ると、6～8時間は続けて作業をします。かなりの重労働です。宇宙飛行士は体力勝負です。

宇宙医学の方向性

生命医学の宇宙実験を含めた宇宙医学には2種類の方向性があると、JAXAは考えています。一つは地上の生活を豊かにする、地球人のための宇宙医学。宇宙実験の成果を地上の医学や医療研究に生かすものです。もう一つは宇宙人のための宇宙医学。宇宙人を研究するのではなく、私たち人類が地球を飛び出て生活圏を宇宙に展開するときに必要になる技術開発、研究です。あるいは地球低軌道における商業宇宙活動や、月・火星への宇宙探査などに必要な研究です。

地球人のための宇宙医学としては、ISSにおける生命科学実験が貢献しています。先ほどの高品質タンパク質結晶生成実験、メダカやゼブラフィッシュ、マウスなどの小動物を使った実験、さらに宇宙飛行士自身が被験者となり、宇宙空間では人間の体にどのようなことが起きるのかを調べる医学実験などです。

宇宙飛行士の健康管理技術などに関するノウハウは、地上の医療や医学研究に役立っています。たとえば宇宙食は、災害時に用いる災害食に応用できます。小動物実験で得られたデータは、地上の人間に関するさまざまな疫学データと比較することにより、人間は長い人生の間にどんな病気になるのか、どんな遺伝子を持つ人がどんな病気にかかりやすいかということを調べる材料になります。タンパク質の結晶分析は、新しい人工血液の開発に寄与できます。

現在は民間企業もロケット開発を進めるなど、一般の人の宇宙旅行もけっして夢ではない時代になりました。二つ目の

宇宙人のための宇宙医学としては、宇宙旅行やスペースコロニーにおける生活のための実験を行っています。船内で栽培したレタスなどの野菜を持ち帰って味や性質を調べたり、麦を栽培したりもしました。

このような将来の有人宇宙活動に向けて、ＪＡＸＡは今年の初めに「宇宙医学／健康管理技術研究開発に係る意見募集・研究提案募集」を始めました。このように企業、研究所、大学などとも協力しながら将来に向けた研究を行い、私たちの健康長寿をさらに伸ばし、元気で長い人生を楽しめる社会の実現に貢献できればと考えています。

no.28

医心館
（同志社大学）

医心館は、２００８年４月に開設された生命医科学部・研究科の教育研究拠点として設置が計画された建物で、サイエンス分野に特化した教育研究の拠点として２００８年２月に竣工しました。

鉄筋コンクリート造、地上６階、地下１階建て、北棟、南棟及び特殊実験棟からなる同館の延床面積は１６，０００㎡を超えています。北棟には主に医工学科・医情報学科及び一部医生命システム学科の実験室、環境保全・実験実習支援センター事務室、検収センターなどを、南棟には主に医生命システム学科の実験研究室及び生命医科学部長室、同事務室などを、特殊実験棟には動物実験室とＲＩ（ラジオアイソトープ）実験室を配置しています。

建物正面のエントランス部分に緩やかな階段のアプローチと広場を設けることで威圧感のない開放的で明るい空間を実現する一方で、入退室管理を含めたセキュリティーシステムの整備を十分に行い、教育研究環境の向上を図っています。

「医心館」の館名は、創立者新島が志した医療教育への想いを継承し、「医の心を耕す」「医の心を科学する」という同志社の教育姿勢を表したものとなっています。

建物案内

no.29

南体育館

（同志社中学校・高等学校）

2019年10月に解体される南体育館

トラス構造の屋根形状

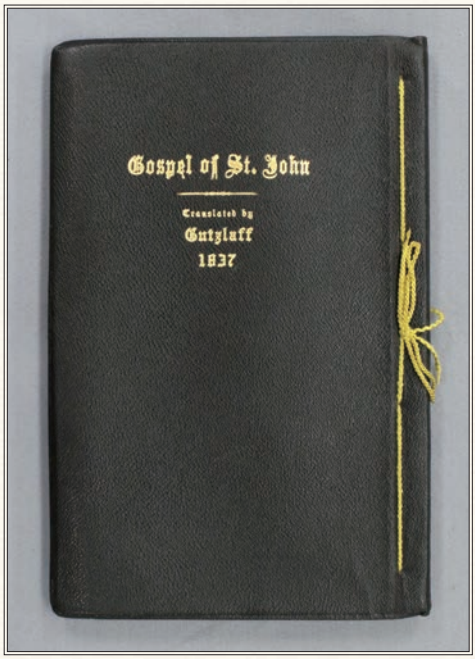
竣工当時の南体育館（1966年）

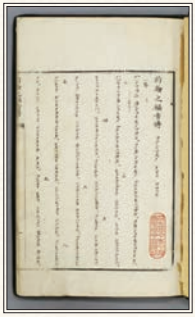
１８９６年に同志社尋常中学校設立、その後、様々な変遷の後、１９４７年に日本国憲法・教育基本法が制定され６・３・３制の学制が開始され、男女共学の新制・同志社中学校となった。翌１９４８年に今出川キャンパスにて新制・同志社高等学校が誕生し、１年後の１９４９年に高等学校は岩倉校地に移転。その約60年後、２０１０年に同志社中学校が岩倉校地に移転、高校と統合し、同志社中学校・高等学校として新たな歩みを始める事となった。当時岩倉校地に有った校舎の多くが建て替えられたが、１９６６年に竣工したこの南体育館は、そのまま残される事となった。竣工当時、パイプによる四角錐のトラス構造の屋根形状と工法、放送室も装備されている体育館は珍しく、また、学校体育館としてのフロアー面積も当時西日本一であった事から、新聞社から取材される程、注目を集める体育館であった。

２０１６年、残された南体育館及び付属棟を建て替えする事が決定し、２０１９年９月末、新体育館のメインアリーナ棟が完成した後、この南体育館は解体され、その跡地に付属棟のサブアリーナ等が建設される。岩倉校地の歴史と共にここに存在してきた約54年間、高校生のメインアリーナとして約２万人の生徒が利用してきたが、いよいよ最後の時を迎える事となる。この建物と共に青春の時を過ごした多くの高校生の汗と涙、そして、ここを教場として生徒達と共に学び過ごした教職員の心の中に、〝想い出〟として深く記憶され、いつまでも色褪せる事はないだろう。

— collection 10 —

ギュツラフ訳聖書『約翰福音之傳』





２０１８年12月、聖書協会共同訳聖書が刊行された。新共同訳聖書の刊行以来、約30年ぶりの新翻訳事業で、我々は最も新しい和訳聖書を手にすることとなった。最新和訳聖書の出版を機会として、今回は新島遺品庫に収蔵されている最古の和訳聖書を紹介したい。通称「ギュツラフ訳聖書」と呼ばれる『約翰福音之傳』である。

この『約翰福音之傳』は、最初に日本語に訳された聖書の一つで、１８３７年にシンガポールで刊行された。訳者は、ドイツ人のカール・Ｆ・ギュツラフ（Karl Friedrich August Gützlaff, 1803～1851）で、主に東南アジアから中国の伝道に携わった宣教師である。語学に明るかったギュツラフは、タイ語、中国語、そして日本語への聖書翻訳を手がけ、アジアにおける聖書翻訳の功労者であり、聖書和訳の先駆者である。１８３５年12月、マカオのギュツラフの家に日本人漂流者

3名が身を寄せることとなり、ギュツラフは彼らの助けを借りながら、新約聖書の翻訳に着手した。約1年で、『約翰福音之傳』（ヨハネによる福音書）と『約翰上中下書』（ヨハネの手紙1、2、3）の和訳が出来上がり、シンガポールの米国伝道協会の出版所である「堅夏書院」から出版された。原本には刊行年月日が印刷されていないため、これまで諸説議論もあったが、同志社所蔵本には表紙裏に“Gospel of John in Japanese; translated by Mr. Gutzlaff; printed in Singapore, May 1837”とメモ書きが残り、刊行年月を類推する一つの手がかりにもなっている。

初めのページをめくると「約翰之福音傳　ヨハン子ノ　タヨリ　ヨロコビ」（「ヨハネによる福音書」の意味）のタイトルのあと、1章1節「ハジマリニ　カシコイモノゴザル、コノカシコイモノ　ゴクラクトモニゴザル　コノカシコイモノワゴクラク。」と続く。最新の聖書協会共同訳では「初(はじ)めに言(ことば)があった。言は神と共にあった。言は神であった。」と訳されている。つまり「カシコイモノ」＝「言」、「ゴクラク」＝「神」を意味しているのである。聖書和訳の黎明の苦労が偲ばれる。

この『約翰福音之傳』は、現在世界でも16冊しか残っていないとされる。そのような稀覯本がなぜ同志社に残されているのだろうか。これは、１９３８年にアメリカン・ボードから同志社に寄贈されたものである。木版印刷の和綴聖書で紙数は60丁、黄色の内扉には「新嘉坡堅夏書院蔵板、約翰福音之傳、善徳纂」と印字され、その外に茶色い唐紙の表紙がついている。ボードからの寄贈時に“Gospel of St.John Translated by Gutzlaff 1837”と印字された黒革のカバーが付されているのが、同志社所蔵本の特徴である。

聖書の贈呈式は、１９３８年８月18日13時から、アーモスト館において挙行された。このために来日したボードの副会長フレッド・F・グッドセルがプレゼンターを務め、同志社側は当時の総長事務取扱牧野虎次が代表で受け取った。グッドセルは、この貴重な聖書の贈呈の辞を次のように締めくくった。

「本書が日米両国基督教徒の友情のシンボルとして真理を尊ぶ精神の標的として又堅忍不抜の精神の表徴として永く伝えられんことを」

第二次世界大戦勃発の前年に、友情のシンボルとしてボードから贈られた最古の和訳聖書が同志社で大切に受け継がれてきたことは、この聖書自体が持つ希少性以上の意味を我々に感じさせるのである。

同志社社史資料センター

同志社ナウ

オープンキャンパス2019開催

大学入学センター

２０１９年７月28日（日）京田辺校地、８月４日（日）今出川校地、それぞれの校地において「オープンキャンパス２０１９」が開催された。昨年は、台風の影響で京田辺校地での開催が中止となったが、今年は両日とも天候に恵まれ、無事両校地で開催することが出来た。

オープンキャンパスは、受験生に「同志社大学での学び」を伝えることを目的とした入学広報の根幹となる全学的なイベントである。２０１６年度以降、両校地あわせて２０，０００名を超える大イベントとなっているが、今年度も記録を更新し、過去最多となる２１，９３０名（京田辺校地８，６４１名、今出川校地１３，２８９名）の来場があり、大盛況の中、終了した。

両校地共通のプログラムとして、大学紹介・入試説明会や教員による学部紹介・模擬授業、ＡＯ入試説明会、キャンパスツアー、個別相談のほか、学部による独自企画イベントや礼拝堂でのパイプオルガン演奏などが実施された。

最も参加者が多かったプログラムは「大学紹介・入試説明会」で、入学課担当者が、本学の教育理念やトピックス、学生生活・就職等に関する大学紹介ならびに各入試制度の概要や一般選抜入学試験の傾向と対策等について説明をしている。両校地で約９，４００名の参加があり、実に来場者の４割が参加していた。

来場者アンケートによると９割以上が「大変満足」「満足」と回答し、「同志社大学を体感出来た」「行きたい学部が見つかった」「同志社大学に入学したいという意欲が高まった」などの感想もあり、本学の魅力を大いにＰＲすることが出来た。

冒頭にも触れたように、オープンキャンパスの来場者は年々増加しており、今後も増えることが予想される。35度を超す猛暑の中、２０，０００名を超える来場者を安全にかつ適切に誘導することが求められている。

同志社ナウ

「ガーデニングボランティア」

女子大学ボランティア活動支援センター長　小﨑眞（こざきまこと）

女子大学のボランティア活動支援センターは2015年4月に設置されました。以来、当センター主催のボランティア活動は微々たる歩みでしたが、このたび学内関係部署のご協力に支えられ、京田辺キャンパスでのガーデニングボランティアを7月10日に実施。美しく魅力に満ちたキャンパス作りのために学生を募ったところ、留学生を含む14名が参加しました。

造園会社の女性スタッフにご指導いただき、まず花の位置や並びの仮置きから始めました。参加者同士で相談をしつつ、時にはプロのアドバイスも得て、和気あいあいとした雰囲気で花を植え、最後は水やりをして活動を終えました。完成を見た女性スタッフからは、「とても丁寧に作業してくれたので、仕上がりが綺麗でさすがだと思った」との嬉しい言葉もいただいています。

その後は植えた花を眺めながら恵愛館食堂で歓談のひとときを分かち合いました。自分たちの手によって明るく綺麗になったキャンパスを見た学生達は、「貴重な体験ができて楽しかった」「キャンパス作りに貢献できた」「これから花がどうなるか楽しみ」と、達成感・充実感にあふれていました。このように今回の活動では、学生達と共に行うキャンパス作りの新しい可能性を感じました。本活動は、10月にも実施する予定です。

このほか、本学ボランティア活動支援センターでは、連携協定を締結している「石鎚会」「淀川キリスト教病院」「京都大和の家」をはじめ、京都市および京田辺市の社会福祉協議会・ボランティア団体との連携を深めています。また、地域のイベント（祇園祭ごみゼロ大作戦・木津川マラソン）のボランティア活動にも積極的に関わり始めました。さまざまな活動や学修機会を通じて、ボランティア精神が浸透する大学づくりや、学生の大学への帰属意識の醸成に貢献するため、当センターの活性化に努めたく思います。

同志社ナウ

「数学甲子園」にチャレンジしました！

中学校・高等学校教諭　園田毅（そのだ つよし）

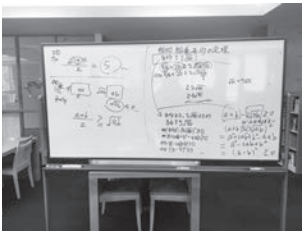
中学校では、各教科が昼休み・放課後や土日・休暇中に年間120を超える特別課外授業「同中学びプロジェクト」を実施しており、本校教員の主催する体験やゼミ形式の学習、大学・企業への訪問活動などを行っています。

その中の一つとして、日本数学検定協会が主催する数学甲子園への参加を中学生に呼びかけています。2018年夏、2015年に引き続き、同志社中学校から2度目のチーム参加を果たすことができました。チーム名は「チームタバタさん」（3年教科担当者名）でした。

今回は3年生5名でチームを作り、休み時間や放課後、夏休みに過去問（2016、2017）を解き合い、教え合いながら、7／31京都予選当日まで練習会を重ねました。高校の学習内容が多く、数列やベクトル、微積分の問題には時間をかけてとりくみました。ちなみに、2017年の問題で最も難しかった（意味がわかりにくかった）のは問15、必要な航空路線数を問うものでした。（主催者HPで過去問を見られます。https://www.su-gaku.net/events/koshien/sample/）

京都予選では、本校生徒以外は、京都府他、高校生チームばかりでした。開始直前まで、持参したノートを見ている人もいました。14時30分開始、60分間で20題の高校数学レベルの問題に、他校の高校生とともにチャレンジしました。例年レベルが上がっている予選問題、今年もさらに難度が上がっていましたが、制限時間いっぱい奮闘してくれました。皆さん、おつかれさまでした！

写真右は、会場風景です。まわりはみんな高校生です。写真下の2枚は、7月中旬の練習会（本校図書メディアセンター）で過去問を解き合う風景です。難問にも果敢にとりくんでくれて、教えあう場面も見られました。2019年夏も中学生チームを作り、連続して参加することができました。



同志社ナウ

緊急地震速報受信システムの設置
～高校生徒自治会からの提案～

香里中学校・高等学校教諭　防災委員長　加藤憲（かとうけん）

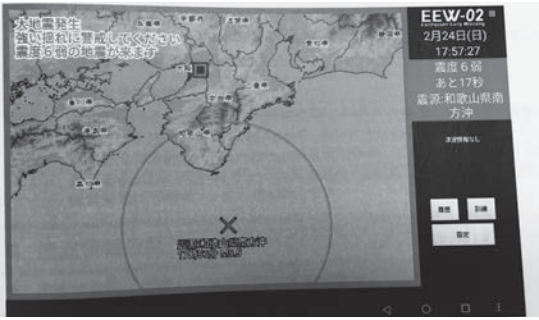
２０１８年６月18日７時58分、いつもと変らない朝の登校時を突如襲った大阪北部地震。

その大きな揺れは、私たちの防災意識を高めるには十分すぎるほどのものでした。

地震の直後、高校生徒自治会から２つの提案が校長に示されました。１つは防災訓練の在り方について。もう１つは緊急地震速報受信システムの導入についてでした。

緊急地震速報は、地震の発生直後に、揺れの到達時刻や震度を予想し、可能な限り素早く知らせる情報のことで、スマートフォン等で受信できます。これにより強い揺れが起こる前に、自らの身を守る行動がとれます。本校ではスマートフォン（携帯電話）に関して、校内では電源を入れないという規定があり、速報の受信ができないため、校内放送等で速報が流れるようにできないかとの提案でした。

防災委員会での検討の結果、緊急地震速報販売センター（株）の「ＥＥＷ―02」システムを校内放送設備に接続することを決め、今年の３月より稼働を始めました。本校所在地での予想震度が４以上になったときに校内放送で速報が流れるように設定しています。



「EEW-02」のデモ画面

警告音（チャラン・チャラン）に続いて「まもなく大きな揺れが来ます。揺れに備えて下さい。」という曖昧表現が一般的ですが、このシステムでは「震度５弱の地震が来ます。20秒前。」と詳細表現にも対応しています。

訓練機能も内蔵されており、震度と地震の到達時間を自由に設定し、防災訓練に活用可能です。

生徒の皆さんには１学期の始業式にシステムの紹介をし、４月末の防災訓練にて実際に活用しました。今後は、抜き打ち訓練やホームルーム以外にいるときの訓練など、様々な条件下での訓練を考えています。実際に速報が流れたとき、瞬時に対応できるように、継続的に訓練することが大切であると考えています。

同志社ナウ

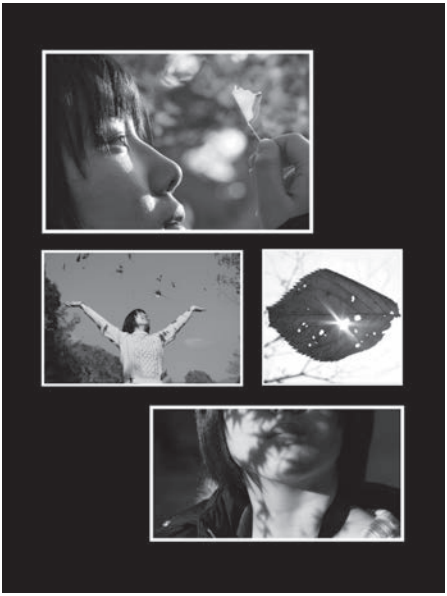
写真クラブの歴史と活躍

女子中学校・高等学校　古谷直子（ふるたになおこ）

本校の写真クラブは、創立されてから今年丸10年が経ち11年目のスタートを切りました。

写真クラブが創立された11年前は、その数年前からデジタルカメラが普及し、世間でも所持するカメラと言えばフィルムではなく、デジタルという人が増えてきた時代でした。また、フィルムの現像は薬品を使い、暗室という特別な環境も必要でしたが、デジタルになりパソコンとプリンターがあれば手軽に現像ができるようになるという時代背景を受け、本校でも写真クラブを創設したいという声が高まりました。そして、一年間同好会としての活動を経て、2009年度より正式に写真クラブとしての活動が認められるようになりました。

クラブ創設後は、私学展での入賞をはじめ様々なコンクールでの入賞をめざし、取り組んできました。その努力の結果、私学展では11回の参加中9回受賞と好成績をおさめています。また、活動の幅を広げようと、全国及び近畿高等学校総合文化祭選考となる作品審査会に2014年度より参加し、昨年度までに全国は2回（計3作品）、近畿も2回（計5作品そのうち2作品は優秀賞受賞）出品できました。今年度行われる全国及び近畿にも出品が決定しています。今後は、写真甲子園への本選出場を目指して頑張ります。



2019年度 全総出展作品　藤田菜緒
『17才・私だけの秋』

2019年度 近総文出展作品　織田まなみ
『スポットライト』

キャリアのけもの道

浦坂（うらさか） 純子（じゅんこ）
（大学社会学部教授）

縁あって、これまでに2冊の新書を上梓しました。いずれも「ちくまプリマー新書」というレーベルです。中高生にも理解できるようにやさしく書くことが必須条件でしたが、それでも執筆時点までのなけなしの研究成果を全て詰め込んだといっても過言ではありません。

生徒、学生から社会人へ

1冊目は『なぜ「大学は出ておきなさい」と言われるのか―キャリアにつながる学び方―』というタイトルで、2009年1月に出版しました。1998年に博士号を取得した際の研究テーマが「新卒労働市場の実証分析」で、大学生の就職活動に関するデータを分析したのですが、就職活動の成否には、どのような大学生活を送り、どのような力をつけたのかが決定的に重要だと思い、次第に大学教育にも関心を寄せるようになりました。

当時は、いわゆる「ゆとり教育」の導入を背景に、大学生の学力低下が声高に叫ばれていた時代です。私自身、統計の授業を担当していて、高校までの数学の知識がすっぽり抜けしまっている学生に驚いたことも少なくありません。学力低下というより、こんなに偏りのある学力では（いくら文系学部でも）大学での学びに支障をきたすのは必至で、「このまま社会に送り出したらまずい」と焦るほどでした。

なぜ学力に偏りがあるのかは明白で、私立大学文系学部の場合、理数系の科目を捨てて受験勉強をする生徒が多数を占めているからです。入試に合格するまではそれが合理的でも、先々困ったことになるのではないかという問題意識から、三つの私立大学経済系学部出身者を対象に調査を実施し、大学入試で数学を受験したか否か（数学学習を放棄しなかったか否か）が、就業後の所得や昇進に影響を及ぼすことを明らかにしました。

「数学を受けたら年収が上がる」とやや（かなり?）短絡的に捉えられたきらいはあったものの、自分の研究が世間の耳目を集めるという経験は非常に強烈でした。ネットが普及し始めており、あることないこと、様々な批判も受けましたが、「社会の要請に応えられる研究をしたい」という思いは、これを契機に一段と強くなったような気がします。

本当に伝えたかったことは、堅牢で幅広い学力の土台を作る時期に、偏りのある学習を促すような各種制度の問題と、

その長期にわたる弊害が見過ごされていることへの懸念でした。とはいえ、制度が容易に変わらない以上、生徒や学生、そして私たち教員にできることは限られています。

高校までに揺るぎない基礎学力を作り、そこに大学ならではの学びを積み重ねていく。何を学ぶかではなく、どう学ぶかという点を重視し、そのプロセスを遂行できることが、社会人としての底力にもなり得る。まさにそれが「大学を出ておきなさい」と言われる理由であり、力をつければ大丈夫、きっとやっていける、そう確信して1冊目を書き終えました。

卒業後40年以上、どう働く?

それから8年が経過し、働くことを取り巻く環境は激変しました。学校における「キャリア教育」も研究テーマとして扱うようになり、複数の科目で実践もしていますが、基本的には「新卒で失敗すると後が辛いよ」と教えざるを得ません。それは、紛れもない事実だからです。だから自分の将来をよく考えて、力をつけ、「しっかりした仕事」に就くようにと。

しかし、優良企業、正社員といった「しっかりした仕事」は皆に行き渡るほどの数はありません。椅子は減っているのに、参加者は増えている椅子取りゲームのようなものです。何をどう努力しても全員が椅子を手に入れられないのに、それでも何としてでも椅子を手に入れよう、そのためにがんばろうと叫び続けることが苦痛になってきました。

そこで2017年2月に出版したのが2冊目の『あなたのキャリアのつくり方—NPOを手がかりに—』です。あとがきに、「普通に働く」からあぶれたら終わり、という見方に対して、「そうではない」と言える何かを示したい、と書きました。例として取り上げたのが、20年来研究対象として追いかけてきたNPOです。近年、NPO活動やソーシャル・ビジネスに取り組む若者が増え、その社会的発信力の高さが目立つようになってきています。

昨年、財界人が立て続けに「終身雇用を続けるのは難しい」と発言しました。新卒一括採用も不透明感を増しています。単線型のキャリア、つまり「しっかりした仕事」で定年まで勤め上げられる人、高速道路を走り切るようなキャリアを描ける人は確かにまだ存在します。ただ、高速道路に上がれない人、途中で下りる人、あるいは高速道路自体が崩れてしまうことも、今後はかなりの確率で起こりそうです。であるならば、もっともっと選択肢が必要です。

高速道路以外のけもの道は、いまだ「意識高い系」というレッテルと、「そんなに甘いものではない」「誰もができることではない」の壁に阻まれています。しかし、自分らしい椅子を会社勤め以外に見出して、かけがえのない自分と自分の良さを社会に活かしている人は大勢います。そのことを知らない、あるいは認めようとしないだけではないでしょうか。「しっかりした仕事」に就けなければ終わり、では決してないはずです。

今の大学生は、恐らく50年後も働いています。50年前、ようやくアポロが月に着陸しました。GAFAなど影も形もありません。50年後もまた、GAFAなど影も形もないかもしれません。もちろん私もこの世にはいないでしょう。その頃には、多彩で魅力あふれる「キャリアのけもの道」が縦横無尽に走っている社会であればいいなと夢想しつつ、これからも研究を続けていきたいと思います。

子育てへの不安が生んだ研究

荒渡　良（あらわたり　りょう）
（大学経済学部准教授）

２００９年４月、大阪大学で博士号を取得したばかりの私は長野県松本市にいた。９歳から27歳までおよそ18年間暮らした大阪を離れ、春から信州大学で教鞭をとることになったのだ。着任後ほどなくして結婚し、家庭を持った。「いずれは子供を育てることになるだろう」といつからか漠然と感じていたが、いよいよそれが現実的になってきた時、唐突に日本で子育てをすることへの不安がよぎった。これが、私が「子育て支援政策に関する実証分析」という研究テーマに取り組むようになったきっかけである。

もともと、私は経済学の中でもマクロ経済理論、つまり数理モデルを用いて、一国全体や世界全体を対象に、経済の仕組みを明らかにしようとする分野の研究者である。これまで信州大学、名古屋大学、同志社大学と３つの大学で教鞭を執ってきたが、いずれの大学でも担当講義はマクロ経済理論に関連するものばかりだった。

それに対して「実証分析」とはデータと統計学をツールに用いる分析方法で、理論分析とは対極的なものである。つまり私は「日本で子育てをすることへの不安」にかられて、それまでとは全く異なる分析手法を採用した研究に挑戦しようと思い立ったのである。私を知るどの知人も「荒渡が実証分析？」と驚いた。私自身も、よもや自分が実証分析に取り組むとは思ってもみなかった。環境の変化は人をこれほどまでに変えるものかと、驚いたものである。

しかし、思い立ったからには始めてみようと、私は学生の頃に受けた授業のノートや古い教科書を本棚から探し出し、実証分析の方法論を再度勉強し直した。幸いにもその頃務めていた信州大学経済学部は若手研究者が研究に没頭することに寛容であり、また、美しい自然に囲まれた松本の街は時間をかけて新しいことに挑戦するには最適な環境であった。幸運なことに、その後、科学研究費補助金をはじめとする競争的資金を複数獲得し、いくつかの論文を学術雑誌に掲載することができた。例えば、以下に記すのはその研究成果の一つである。

【研究事例：「子育て費用の時間を通じた変化―日本のパネルデータを用いた等価尺度の計測―」（宮本由紀氏との共著）、『日本経済研究』、No. 76, pp.1 - 25、２０１８年３月。】

この研究では「子育てをするための費用は時間を通じて増加しているのか？」という素朴な疑問に答えることを目的としている。子育て費用の推計方法にはい

くつかの方法があるが、この研究では最も一般的な方法である「等価尺度法」を採用している。等価尺度法とは「夫婦だけの世帯に子供が一人加わった時に、子育て世帯の夫婦が以前と同様の厚生水準を達成するためにはどれだけの追加的な支出が必要か」を計測し、それを子育て費用とする方法である。

数千人の対象者を数年間に渡って追跡調査した巨大なデータセットを用いて統計的な分析を行った結果、１９９３年から１９９９年までの期間と２００３年から２００９年までの期間にかけて、中学校入学前の子供の子育て費用が増加していることが確認された。特に２歳以下の子供の子育て費用の増加は顕著であり、これは以前と比べて子育て期間の前半における費用負担が重くなっていることを意味する（図１を参照）。

ここから、次のような政策的含意が得られる。まず、０歳から２歳の子供の子育て費用が増加していることは、以前と比べて、子育て期間の序盤における費用負担が重くなっていることを意味する。これより、就業期間が短いために所得が低く、貯蓄も十分に蓄えられていない若年層にとっては、出産・子育てをすることは非常に難しくなっていると言うことができる。もしも子供を持つことから得られる満足度が以前と変わらないのであれば、この子育て期間の序盤における経済的負担の増加は、費用負担能力が十分に備わるまで出産を遅らせ、晩産化・少子化の一因になると予想される。

では、このような状況に変化に対して適切な子育て支援政策が実施されてきたのだろうか？子育て支援政策の代表格とも言える児童手当は２００７年以降、３歳未満の幼児を育てる世帯への支援を拡充してきた。これは本研究で明らかとなった子育て費用の変化に上手に適応していると評価できる。一方で、方向性は正しいものの児童手当の支給額の増額分を子育て費用の増加分が上回っており、幼児を育てる世帯の経済的負担が以前に増して大きくなっていることは否定できない。従って、今後も更に３歳未満の児童を育てる世帯への支給を拡充すべきだと結論付けられる。

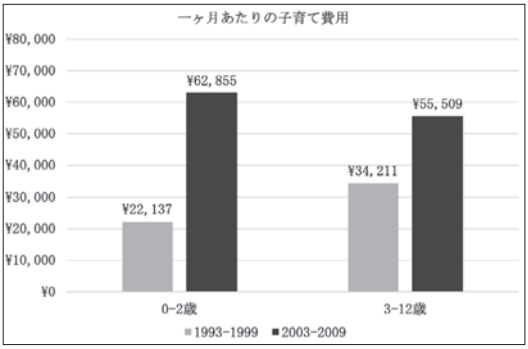


図１：等価尺度法によって計測した一ヶ月あたりの子育て費用

さて、マクロ経済理論という「本業」に精を出しつつ、私は現在も「子育て支援政策に関する実証分析」という研究テーマに取り組み続けている。この研究テーマに取り組み始めてから既に10年の歳月が流れた。その間に私は二人の愛する娘を授かり、母校である同志社大学に教員として戻ってくることもできた。子育てをすることに対する不安は消えたわけではないが、目が回るような毎日を過ごしているうちに、かつてのような漠然とした不安は取り除かれたようである。しかし、私はこれからも「子育て支援政策に関する実証分析」を続けていこうと思っている。かつての私のように、子育てに不安を抱えている誰かにとって、私の研究成果が少しでも助けになるのならば、研究者としてこれほど嬉しいことはない。

デジタル・ヒューマニティーズの潮流

河瀬（かわせ） 彰宏（あきひろ）
（大学文化情報学部助教）

21世紀の文化研究

文化現象――人々が共有する行動様式・生活様式――を対象とした研究と聞くと、おそらくフィールドワークや文献調査を基調とする文系学問のイメージが先行し、理系学問との関連がイメージしにくいかも知れません。しかし、近年は学際的な研究環境が整備されてきたことにより、文学・美術・芸道・思想など多くの文化的活動は、データサイエンスの射程に入り、理系学問との連携が促進しています。

本稿では、従来と異なる視点から文化研究を行うデジタル・ヒューマニティーズと、同志社大学文化情報学部における教育活動について紹介します。

定性的研究と定量的研究の境界がフロンティア

学問の方法論について基本に立ち返って整理すると、定性的研究と定量的研究の大分類があります。定性的研究は、対象の観察と性質を記述することで理解を深めていく方法論をとり、人文科学諸分野で広く実施されています。定量的研究は、計測によって対象の仕組みを解明する方法論をとり、自然科学諸分野で実施されています。定性的研究は文系の手法、定量的研究は理系の手法といったイメージを抱かれるかと思います。心理学や経済学のように文系と理系の中間に位置する学問では、目的と対象にあわせて定性的研究と定量的研究を適宜選択します。誤解を恐れずに申し上げれば、一般的にどの学問もどちらかの手法しか使いません。研究者もいずれかの分野に身をおき、両者の交流はほとんどありませんでした。

文化現象を対象とした研究は、どちらの方法論に立脚した研究でしょうか。人々の行動様式から形成される文化現象は、その内部にどのような因果関係や論理が内在しているのかを直接把握することができません。したがって、多くの読者は定性的研究と答えられるでしょう。しかし、定性的研究には、科学における再現可能性や反証可能性を担保しにくい問題があります。換言すれば、定性的研究の方法論は、恣意性や主観的判断が含まれる可能性が排除しきれません。

デジタル・ヒューマニティーズ

この問題を解決するために、文化現象に対する定量的研究が増加しています。

とりわけ、統計学や情報学の方法論を導入する文化研究は、デジタル・ヒューマニティーズ（以下ＤＨ）と呼ばれ、定性的研究と定量的研究の境界を開拓しています。ＤＨは、国際的に学協会連合傘組織（ＡＤＨＯ）を展開しており、２０１１年に日本支部、２０１６年には南部アフリカ支部が設置され、多言語・多文化にネットワークを拡張しています。

ＤＨは、歴史的な文献・地図・写真・絵画・音楽など、従来の人文科学諸分野の対象に定量的研究を導入し、新たな解釈の可能性を提示することを目標とします。例えば、私は２００７年以来、日本伝統音楽を対象として、音楽学者・人類学者・民俗学者が定性的研究から得た知見を定量的研究で裏付けたり、音楽の伝播・変遷の問題に対して新たな解釈の可能性を提示することを目的としたＤＨ研究を実施しています。従来の議論を客観化させる工夫として、民謡の旋律をデジタル化し、確率論・情報理論・言語理論を融合させた手法によって、特徴を抽出します。そして、多変量解析を適用することで音楽文化の地域性を見出すことを試みています。しかし、ＤＨでは、分析手法の豊穣化がまだ発展途上にあり、デジタルアーカイヴやデータベースの構築に時間がかかっている現状があります。私の研究対象についても、音楽文化の発展・衰退を予測するに足るデータの収集・共有には、まだ長い道のりがあります。

ＤＨと類似した研究にソーシャル・コンピューティング（以下ＳＣ）があります。ＳＣはコンピューティングに参画する社会の構成員＝一般の人々からデータを収集し、体系的に知の基盤を構築したり、新しいサービスを創出することを目標とします。主にＳＮＳを通じた個々人の活動記録、共有されるコンテンツを分析対象とするため、データ量は数万件～数億件（ビッグデータ）を扱います。一方、ＤＨで扱うデータは、人文科学の専門家が収集・蓄積した資料が基本であり、著作権の制約もあって20世紀初頭より過去の歴史的資料を扱う事例が多く、ＳＣとは対比的です。そのため、ＤＨで扱うデータ量はＳＣの数千～数万倍も少なく、両者の間ではデータの質と量に違いがあります。どちらが優れているかを議論したがる研究者は多く存在します。しかし、両者の目指す処は異なるため、そのような議論は不毛であり、むしろ相互に関心があれば、学問の発展のために知見・技術を提供し合うことの方が建設的であると私は思います。

デジタル・ヒューマニティーズと文化情報学部

文化情報学部は、文化現象に対して、統計学や情報学を接点とするデータサイエンスを導入した研究と教育を実践しており、ＤＨと多くの共通点があります。例えば、制度化された学問の垣根を取り払った分野横断的なカリキュラムは、ＤＨの研究哲学・教育理念と重なります。しかし、現実には学生が在学中に複数の専門領域を修めるには作業量が膨大でありとても大変です。私は、ＤＨコミュニティを通じて個人が修めきれない複数の学問領域を横断的かつ有機的に結びつける意義を学びました。これを学部教育に援用し、専門領域の異なる人々と協同しながら各分野のエキスパートを橋渡しする人材の育成を心掛けています。本学部が標榜する文理融合を実践し、個々人が学際的な視野をもつことができれば、世の中に山積する諸問題は大幅に解決されるかも知れません。そのためには、どのような教育を実践していけばよいのかが課題であると考えています。

非行・犯罪行動変化と回復を支える

毛利（もうり） 真弓（まゆみ）
（大学心理学部准教授）

罪を犯した人を支援する意味

約15年間、少年鑑別所や刑務所等、罪を犯した少年・成人が収容される施設で心理職として勤務した後、他大学を経て、2019年4月より心理学部の専任教員として勤務しています。

加害者・犯罪者の心理支援をしているというと、「怖くないのか」という疑問や、「なぜ加害者なんかの味方をしているのだ」という批判まで、様々な反応を受けます。とはいえ、ほとんどの非行少年・犯罪者たちは、「犯罪行動をしたという点について責任を負わなければいけない」という一点を除き、ごく普通の、一人の人間です。むしろ幼少時からの暴力被害や、弱いものが搾取され抑圧される社会の犠牲者の側面も持ち合わせてもいて、心理的な支援の対象とすべき人でもあります。被害者の支援と加害者の支援はどちらも大事であり、加害者の回復を支援することは、次の被害者を減らす一つの手だてでもあると考えています。授業で必ず学生に伝える言葉があります。「父であり夫である一人の男性（もしくは母であり妻である女性）加害者が、犯罪行動をやめ、暴力のない対等な夫婦関係を持ち、子どもを適切な形で愛し、モデルになることが出来たとしたら、何人の『未来の被害者』が減るか想像してみてください。」

共同体の中で「学び落とし、学び直す」こと

非行・犯罪行動への介入には、多くの場合個人面接ではなくグループが使われます。グループの中で、「俺は／私はこうやって生きてきた」という鎧を脇に置き、他者の視点に耳を傾け、議論し、考え、メンバーで一緒に悩みぬいて支えあうという体験が、犯罪行動からの離脱（犯罪を手放していくこと）に非常に重要だからです。

私が実践・研究しているのは、そうした「回復のための場」作りです。非行少年や犯罪者はそれまでの生活の中で、または「犯罪者」のレッテルを貼られた後の周囲や世間からの排除を受けて、人とのつながりに（心の底で）おそれや不信を抱え、素直に人と交流できにくくなっている面があります。刑務所という、見栄を張っても仕方のない場所で、自分の感情や誰にも話したことのない体験を吐

き出し、時にけんかし、良いことも葛藤も共にする中で、これまでの生き方を「学び落とし」、他者と本当につながり、言いたいことをいい、傷ついたら傷ついたと素直に表現し、傷ついたといわれたら謝れる「対等で対話のある関係性の学び直し」が行われていきます。

刑務所内でのグループワークの様子

心に溜まっていたものを吐き出し、生き方のパラダイムが変わった時、人は顔つきから優しくなります。そうなれた後にようやく、本当の意味で自分が被害者に与えた傷について思いを馳せることが出来るようになると感じています。

対等な関係性と対話のある場を社会にも

私たちが暮らす社会の中でも、誰かに傷つけられた経験、自分の気持ちを聞いてもらえなかった傷つきを抱えた人は存在しています。自分の素直な気持ちを表現することを躊躇し、対話をあきらめていくと、人は相容れない人は排除しようとするようになり、時にそれは孤立を生み、次の加害者を生む温床にもなります。「加害者が変われば未来の被害者が減るのと同じく、対等な関係性と対話のある場が社会に増えることは、社会の中の暴力や憎しみや抑圧、孤立が少し減ることにつながるのではないか」。こうした考えの下、他の研究者や協力者とともに、2017年には刑務所出所者と刑務所職員、行政関係者たちの対話を広島で、2018年には性暴力の被害者・加害者と支援者の対話を大阪で行いました。今年は子供時代に親から性被害を受けた女性とその家族、支援者の対話を大阪で行う予定です。

対話形式を取ると、相手の話を聞いて多くの刺激を受け、フロアに居た研究者が自分の体験を語りだしたり、被害者が加害者のことを慮る発言をしたりと立場を超えた「心の対話のつながり」が生まれます。こうした場で「安心して自分の気持ちを話せた体験」を種としてそれぞれが持ち帰り、それぞれの場で育てれば、社会を少しでも変えられるのかもしれないなどと青臭いことも夢見ています。

2017年の対話イベントの様子

私の授業

心理学部では、2017年に施行された公認心理師法に基づいたカリキュラムを整備し、医療・福祉・教育・産業・司法領域で活躍する公認心理師の教育体制を整備しています。私が担当する公認心理師取得のための必修科目である司法・犯罪心理学の授業では、基本的な知識はおさえながらも、犯罪者の心理を分析して人間の残虐性を掘り下げて「モンスターがいる」と証明するような社会的排除の内容にならないよう、自分と同じ人間が行った犯罪行動を「人として理解する」視点を導入するよう心がけています。非行・犯罪をした人たちの回復に寄与する介入は何か、そして罪を犯した人、失敗した人を排除しない社会作りについて、今後も学生とともに考えていきたいと思います。

英語のアポロジー（謝罪）についての研究と教育

北尾（きたお） キャスリーン
（女子大学表象文化学部教授）

研究：

私が最初に語用論（言語プラグマティクス）の分野、特にスピーチアクト（言語行為）に魅了されたのは、35年以上前、オレゴン州立大学で大学院のコースを受講した時に遡ります。スピーチアクトは、挨拶や賛辞、要求、拒絶、不満など、コミュニケーションにおいて特定の目的のために利用される発話を指します。語用論とは、スピーチアクトがどのように実現されるか、利用可能なストラテジーは何なのか、どの程度の丁寧さが選択されるかなど、特定のコンテクストで使用される言語設定についての研究です。

スピーチアクト研究の課題の1つはデータ収集にあります。最も一般的なデータ収集方法は、Discourse Completion Tests（DCT）です。これは質問紙の形式で、ある状況下でどう反応するか、どのような言葉を使うかを参加者に記述するように求めるものです。その他の方法としては、自然データの収集や参加者によるロールプレイなどがあります。比較的新しい方法としては、音声コーパス（spoken corpus）を利用することです。コーパスはテキストの集まりであり、音声コーパスは会話や講義、インタビューなどのトランスクリプトから構成される言葉の集まりです。映画やテレビ番組からダウンロードした字幕を含む場合もあります。

もちろん、どのデータ収集方法にも長所と短所があります。字幕のコーパスを使用する利点は、大量の言葉、特にコンテクストのなかでのスピーチアクトを含めることができることです。字幕は実際の生活の中での人々の話し方を必ずしも正確に示すものではありませんが、言語の授業でモデルとして堪えうるレベルの現実的なスピーチであることを研究は示しています。もちろん、すべてのスピーチアクトがコーパスで検索できるわけではありませんが、ほとんどすべてのアポロジー（謝罪）は次の5つのキーワードのうちの1つを使用していることが私自身の研究を通して分かってきました：forgive, excuse, pardon, sorry又は他の謝罪の言葉（some form of the word apology）。

私がこの研究に興味を持つようになったのはアポロジーは第二言語・外国語話者にとって難しいが重要なスピーチアク

トであるからです。私はアメリカの連続ホームコメディ『Modern Family』（ロサンゼルスに住む大家族の人間関係を描いたもの）の字幕から小規模コーパスを作成しまし、亡き夫、北尾謙治と執筆した論文（“Apologies, Apology Strategies, and Apology Forms for Non-apologies in a Spoken Corpus”）でこのコーパスを使用し謝罪を研究しました。具体的には、先にあげた5つのキーワードを検索し、謝罪表現、謝罪の一部として使用されたさまざまなストラテジー、および謝罪形式が他の発話行為に使用された事例をカウントしました。その結果、計362の謝罪が見つかりましたが、そのうち実に353個が“sorry”でした。最も一般的なストラテジーの組み合わせは“sorry”にその説明を加えるもの（例えば、「すみません、電車が遅れました」）でした。他の一般的なストラテジーには、強化（“so, really”）や繰り返し（I’m sorry, I’m sorry”）、自己正当化（“In my defense..”）、責任の認知（“It’s all my fault”）、再発しないことの約束（“I’ll never do it again”）と補償の申し出（“I’ll buy you another one”）がありました。

また、別の論文（“A Corpus-Based Study of Responses to Apologies in US English”）では、同じコーパスを使用して謝罪に対する反応を研究しました。謝罪に対して約半分は反応なしでしたが、反応があった残りの半分は「非難の最小化」、「なぜ非難しているのかに焦点を当てたもの」または「非難の正当化」という3つのカテゴリーにまとめることができました。

教育：

私が教えるクラスの1つに、語用論をテーマに英語でコンテンツを教える“Studies in English”があります。まずコースのはじめに、コンテクストが言語の意味と選択にどのように影響するかの実例を示し、学生に評価をさせながら実感させてゆきます。次に学生は語用論の分野全般、丁寧さの理論、特定のスピーチアクトについて書かれたものを読んでゆきます。アポロジーについて教えるとき、私はデータに基づいた学習（Data Driven Learning: DDL）と呼ばれるアプローチを用います。ＤＤＬは、真性の言語の実例を通して学生に言語の使用パターンを発見させる言語学習の帰納的アプローチです。このアプローチはコーパス言語学から発展したもので、学生が文法や語彙使用を学ぶのに使用されてきましたが、スピーチアクトを教えるのにも有効です。私の授業では先にあげたModern Familyコーパスから選択したアポロジーについて、学生はグループで謝罪表現と謝罪ストラテジーを見つけだすタスクも取り組みます。これは、仮説検証と学習者の自律性を促進し、学生が学習スキルを習得するのに役立つ学習者中心のアプローチです。長年このアプローチで教えてきましたが、学生の反応から、学生が自分自身でコンセプトを発見することから満足を得ていることを実感しています。

結論

私は語用論という興味深く有用な分野で研究をし、その専門クラスを教えることができ幸せに思っています。何よりも、その学習を通して学生の英語コミュニケーション能力を伸長するのに役立っていることが望外の幸せです。

ホンモノから学ぶ社会科の学習

金山 香織（かなやま かおり）
（小学校教諭）

1．小学校の道草教育

本校では、子どもたち一人ひとりの自由な発想を大切にし、学ぶことを楽しみながら理解を深めていくことができるような教育を日々心がけています。それは、与えられる学びではなく、自分から「なぜ?」と疑問を持ち、どうすればその疑問を解決できるか、自分たちで考える学びであり、解決していくまでの過程を大切にした学びです。

2．自分とみんなが幸せになる社会を

これからの社会を生きる子どもたちには、自分だけではなく、様々な立場の人のことも考え、みんなが幸せになる社会をつくっていってほしいと願っています。そのためには、自分で考え、行動する力が必要です。社会の一員として自分にできることを考え、行動していくためには、他人事ではなく、自分事として考えられなければなりません。様々な社会事象に出会ったとき、心が動く子どもを育てるためにも、授業の中で、「なぜ?」「どうして?」「知りたい!」と感じる機会をつくるよう意識しています。また、自分だけでなく友達はどう考えているのか、話し合うことで、新たな考えを知り、自分の考えを再構築することができます。それが、一人ではなく仲間と学ぶ意味だと考えます。学級の誰もが、安心して意見を言えるようにするためにも、「心地よい空気感をつくること」や「一人ひとりのものの見方や考え方を尊重し、互いの良いところを見つけ合うこと」を大切にしています。

3．「生しば漬け」ってどうやってつくられているの?

三年生の二学期の学習の一つに「工場でつくられるもの」という単元があります。一学期から「京都の魅力をさぐる」というテーマで学習を進めてきたこともあったので、何か「京都一」のものと子どもたちが出会うことができないか、考えていました。そんな時、小学校と同じ左京区の大原に工場がある「土井志ば漬け本舗」さんとのご縁を頂きました。京都市観光調査によると京都市の土産物の一位は漬物です。そこで、「土井志ば漬け本舗」さんの「生しば漬け」を教材として扱うことにしました。

ホンモノの「生しば漬け」を子どもたち一人ひとりに配り、「何から作られて

いると思う?」と投げかけました。子どもたちは、目で見て、においを確かめ、恐る恐る食べている様子。「紫やから梅干しを混ぜていると思う。」「何か葉っぱみたいなものが入ってる!」「結構、酸っぱいよ。きゅうりかな。」と予想を立てていました。

そこで、原材料は「なす・赤紫蘇・塩」であることを明かします。子どもたちは、「えー!それだけしか入っていないの?」とビックリです。すると次は、「その3つでどうやって作っているの?」という新たな疑問がわいてきました。学校で育てている赤紫蘇の実物を触ったり、生しば漬けの見た目や食べた食感をもとにグループで予想をしました。「茄子を切ったり、味付けたりするのは、機械でして、最後の袋詰めの作業は人がしていると思う。」と多くの子どもたちが、殆どの作業を機械で行い、最後の仕上げ部分を人が行うと予想しました。

次に、しば漬け工場での作業の一部である「樽の中に人が入り、しば漬けを踏んで揉み込んでいる様子」の写真を提示します。すると「えー!人が踏んで作ってるの?どうやって作っているか、もっと詳しく見に行きたい。」という声が上がりました。ここで、「じゃあ、見に行きましょう。」と言ってしまうと、ただ工場に連れていってもらうだけの受け身の学習になってしまいます。そこで、「工場はどこにある?行き方は?調べてみて。」と更に投げかけました。

次の日、子どもたからの「国際会館から、⑲番の京都バスに乗ったら、二十分で工場の前のバス停に着くよ。運賃も百七十円だから、行けると思う!」との声。

その後、工場見学に行き、どのように生しば漬けが作られているか、実際に目で見て、工場で働く人々にお話を伺うことができました。また、学校に帰ってから、学習する中で生まれた新たな疑問を解決するために子どもたち自身が文章を書き、ファクスで質問をするなどの様子も見られました。また、学習の最後に学校で「しば漬け」を作る体験を行うことで、「工場で働く人々は大変なんだな。これからもおいしいしば漬けを作るために頑張ってほしい。」と働く人の思いにも寄り添うことができました。

他にも、岩倉のまちは、どのように土地が使われているかを調べるために小学校の周りを探検した後、地図を作成する活動や小学校から一番近い神社で夜中から行われる「岩倉火祭り」に昔から携わってきた方々にお話を伺う活動などホンモノから学ぶ機会をつくってきました。岩倉という地域をより身近に感じることで愛着もわき、より自分事として捉えることができるのではないかと考えます。

生しば漬けを実際に見て、食べてみる子どもたち

樽の中に入り、しば漬けを揉み込む様子（土井志ば漬け本舗大原工場）

4．自分から求めていく子どもに

自分たちで課題解決するって面白いな、と学習することの楽しさを感じ、もっと学びたい!と意欲的に取り組んでいく子どもを育てていくためにも、一人ひとりの子どもの声や思いを大切に、これからも研鑽を積んでいきたいと思います。

同志社クローズ・アップ

世界で活躍できる人材を育てる法学部の授業

―「グローバルな法律実務家」の育成を目指して

大学法学部教授　川嶋四郎（かわしま しろう）

世界を視野に入れた特殊講義

法学部法律学科の授業科目は、近時大きな変貌を遂げています。かつては、伝統的な六法科目（憲法、民法、刑法、商法、民事訴訟法、刑事訴訟法）などを中心に、講義形式によって理論を教える大教室での授業が主流でしたが、最近では、より広い法分野をカバーする多様で実践的な授業も行われるようになりました。法学部では、特に、国際的に活躍できる法律実務家の育成をも目指して、毎年、三つの特殊講義（少人数演習）を開講しています。それが、「国際人道法模擬裁判」・「法的交渉論」・「国際物品売買と国際商事仲裁」です。いずれも、学生の主体的かつ積極的な学びを通じて、国際的な法領域における、英語を駆使した「理論と実務の架橋」を目指すものです。

私は、法学部や法科大学院で、民事訴訟法や調停法・仲裁法等の裁判外紛争解決手続を教えていますが、以下では、私も担当者の一人である一つの科目を簡単に紹介して、若干の展望を示したいと思います。なお、この授業は、国際私法の高杉直教授と民法の野々村和喜准教授との共同担当科目です。

「国際商取引法のオリンピック」に向けて

特殊講義「国際物品売買と国際商事仲裁」は、年に1度開かれる国際商事模擬仲裁に関する世界大会への参加を目指して開講しています。学生が、国際商取引法や仲裁法に関する理論的な知見を深め、かつ実践的な技能を身につけることを目的としています。特に、毎年オーストリアの首都ウィーンで行われる世界大会は、世界で最も権威のある模擬仲裁大会であり、「国際商取引法のオリンピック」とも呼ばれています。世界各国から３００校以上の名門大学が参加しているのです（〈写真〉参照）。そのほかに、香港大会や国内大会等もあります。

毎年秋に公表される英文の課題問題（Ａ４判約60頁）に備え、春から「過去問」を用いた問題の分析検討を行い、討論を通じて実際にメモランダム（準備書面）を作成したりもしています。学生たちは、申立人・被申立人のグループに分かれ、それぞれのグループ内で、手続法（仲裁手続に関する法）と実体法（商取引の内容に関する法）の担当者に分かれ、それぞれの側の企業代理人の立場で法律実務を行います。学生の希望と授業内での選抜（希望が多い場合には、模擬弁論の実施による選抜）を

経て、ウィーン大会と香港大会等の参加者を決定して行きます。

学生たちは、問題文を読み込み、事実関係を把握し、主張と証拠を整理して、争点を明らかにします。契約書や法の解釈を行い、先例や学説等の調査検討もします。そして、英語による法律文書を作成し、それに基づいて英語で弁論を行う練習等もするのです。このような法を活用した論理的な説得力の鍛錬は、学部の他の様々な授業や演習にとっても有益であり、実社会におけるビジネス感覚の涵養や臨機応変な対応能力の育成にも役立ちます。この授業は、リーガルマインドの形成やコミュニケーション能力の向上だけではなく、チームプレーの涵養にもつながる実践的な授業なのです（なお、近時ようやく仲裁法が『司法試験六法』に登載されました。21世紀日本司法の国際化を考える際には、その習熟も重要な課題なのです。）。

世界大会の大舞台で、学生たちは、各国の著名な仲裁人からコメントをもらうこともでき、また、国際社会で多様な価値観をもった外国人学生たちとの交流を深めながら、キャリア形成のための貴重な刺激を得ることもできるのです。

「京都国際調停センター」等でも

昨年の11月、日本初の国際調停センターである「京都国際調停センター」が、同志社大学に創設されました（瀬領・本誌147号62頁参照）。日本で調停といえば、簡易裁判所や家庭裁判所等の民事調停や家事調停がよく知られていますが、このセンターは、国際的な企業間の様々な紛争を、中立的な第三者である調停人の活動を通じて、合意によって解決するための私的な機関です。従来の裁判や仲裁と比較して、いわば「早く、安く、うまく」紛争を解決でき、当事者間の合意を通じ、将来に向けた友好的な取引関係等の維持や再形成も可能となる手続です。法学部・司法研究科も、センターの運営に協力し、調停等に関する教育・研究活動を実施することなどを内容とする協力協定を、公益社団法人日本仲裁人協会と締結しています。

法学部では、先に紹介した特殊講義以外にも、「民事訴訟法」・「国際私法」・「国際公法」等の伝統的な科目のほかに、「ADR仲裁法」等の新たな科目、さらには、英語で行われる「投資仲裁」・「国際会社法」関係の授業や「台湾サマーセミナー（國立中正大学における夏期集中講義）」など、国際的な視野で法の理論と実践を学ぶことができる授業をも提供しています。

現在の法学部学生は、民事訴訟法だけではなく、裁判外紛争解決制度として近時クローズアップされている仲裁法・調停法などを学ぶことで、紛争解決手続の全体像についての知見を深め、実践の基礎を修得しています。学生たちが、法科大学院を経由するかどうかはともかく、京都国際調停センターをはじめ、国内外の法的紛争解決システムの領域で、より多く活躍できることを願いながら、私たちは日々の教育を行っています。

ウィーン大会開会式　徳田逸人さん提供

同志社クローズ・アップ

学部横断型PBL科目「プロジェクト科目」成果報告会を開催

大学今出川校地教務課

同志社大学では2006年度から、いわゆる伝統的な座学中心の授業形態とは異なった、実践型・参加型の学習機会を重視したプロジェクト・ベースド・ラーニング（PBL）を基本とする学部横断型の全学共通教養教育科目「プロジェクト科目」を設置しています。この科目は、地域社会や企業の方々に講師を依頼し、地域社会や企業がもつ「教育力」を大学の正規の教育課程の中に導入することによって、学生に生きた智恵や技術を学ばせると共に、「現場に学ぶ」視点を育み、実践的な問題発見・解決能力など、いわば学生の総合的人間力を涵養することを目的としています。開設当初の2006年度には文部科学省現代教育ニーズ取組み支援プログラムに採択され、開設14年目を迎える現在においても他大学・教育機関からヒアリング・来訪を受ける等、開設当初から変わらず注目度の高いプログラムのひとつです。

このプロジェクト科目では、春学期と秋学期の授業期間終了時に京田辺校地・今出川校地開講クラスが一堂に会し、学内外に向けて成果を発信する場＝プロジェクト科目成果報告会を実施しており、教務主任会議委員やプロジェクト科目検討部会委員、PBL推進支援センター委員等から構成される審査員によって、講評がなされます。例年、春学期の成果報告会は、オープンキャンパス開催日にあわせて同志社ローム記念館にて実施しており、プロジェクト科目履修生・科目担当者はもちろん、オープンキャンパスに来場されている多くの受験生や保護者の方も足をとめて参加されています。また、過年度の履修生や科目担当者、他府県の教育機関関係者も来場されています。

2019年度春学期成果報告会では、春学期科目2クラスおよび春学期・秋学期連結科目8クラスの履修生が、活動の成果をまとめたポスターをもとに、ポスターセッション形式にて活動報告を行いました。受験生等の一般の方も含めて、

熱気に包まれるポスターセッション会場

開会式

ポスターセッションの様子Ⅰ

履修生の作品に見入る参加者

その数は約１８０人。会場内の各ブースではオープンスペースを存分に利用し、履修生が来訪者に対してアピールのため積極的に声をかける様子が例年以上に見られました。その熱意はプロジェクトの活動を一生懸命にやってきたことの証でもあり、多くの来場者に高評でした。

一方で、春学期の活動成果そのものについては、春学期のみで完結するクラスもあったことから、各プロジェクトの進捗度に圧倒的な差が見られ、活動内容の薄いプロジェクトがより目立つ結果となったことも事実です。審査員からは、課題の確認はできているものの、その解決のために求められる取り組みと導き出された結論との間に微妙なズレを感じるものが散見される、ポスターの出来が不足している、といった厳しい意見も聞かれました。

しかし、それと同時に、春学期・秋学期連結科目については、春学期の時点ではまだ〝座学ではない〟学びのアプローチには届いていないものの、成果報告会で得た痛みや反省を昇華させ、秋の活動に活かして欲しい、との大きな期待も寄せられました。

履修生においては、本報告会で自分たちの活動を客観的に振り返り、他のプロジェクトや意見から沢山の気づきを得られたことと思います。今後の活動への期待とともに、履修生のより深い社会的総合力の涵養がなされるよう、この機会が活かされることを望みます。

ポスターセッションの様子２

ポスターセッションの様子３

表彰式の様子（最優秀賞）

閉会式では、各審査員から講評をいただいた後、最優秀賞、優秀賞、および特別賞の表彰が行われました。今年度は特に、活動や成果が他に追随を許さぬほど高く評価されたクラスに票が集まるなど、発表時には大きなどよめきと歓声がみられました。入賞したクラスには大きな称賛の拍手が送られました。各賞は以下のとおりです。

【最優秀賞】
グローバルビレッジを撮る・観る・創る
―ドキュメンタリー映画制作を通して見つめる京のムスリムと多文化共生
〈今出川校地開講、春科目〉
［科目担当者：直井 里予　科目代表者：王 柳蘭（グローバル地域文化学部）］

【優秀賞】
留学生と創る―!「Cool Japan　和食職人文化読本」制作プロジェクト
（伝統文化継承など今日的課題の観点から）
〈今出川校地開講、春・秋連結科目〉
［科目担当者：遠藤 正彦　科目代表者：高岸 雅子（日本語・日本文化教育センター）］

【特別賞】
京都発！「子育て×働く」のリアルを追求する、キャリア教育探求プロジェクト
～ワーク＆ライフ・インターン～
〈今出川校地開講、春・秋連結科目〉
［科目担当者：戎 多麻枝　科目代表者：川口 章（政策学部）］

同志社クローズ・アップ

ワンダフル・エイジング

女子大学現代社会学部教授　日下菜穂子（くさかなほこ）

自立・共生・共創のプロジェクト

生きる目的に向かう道のりをしなやかに変えながら、新しい自分や予想外の未来に出会う喜びを感じる、豊かな年の重ね方をワンダフル・エイジングとよんでいます。

加齢は、一般にはネガティブなことに捉えられがちですが、内的な側面に目を向ければ、高齢期に幸福感が高い人が多いというエイジングパラドクス（Aging Paradox）の現象が発達心理学の領域で確認されています。

ワンダフル・エイジングでは、豊かな生き方につながる高齢期の心理社会的発達に注目し、他者とのかかわり合いを通してその発達を促すことを目的としています。個の自立を基本に、他者とつながり支え合う共生、喜びの共感で未来を拓く共創を通して、人生100年を豊かに生きる力が育まれると考えています。この自立、共生、共創の3段階を実践するコミュニティとして、ワンダフル・エイジングには、ライフデザインの講座（生きがい創造教室）、高齢者の生き方に学ぶ学校（ワンダフル大学院）、多世代が伝え合う食の場（シェアダイニング）の3つの活動があります。

2010年に生きがい創造教室からスタートしたワンダフル・エイジングは、これまで京田辺市や京都市を中心に、65歳以上の多くの地域住民の方が通われています。今では毎週月曜日に地域の方々が女子大学に通われて、教室で大学生とともに学び教え合っています。

ワンダフル・エイジングの3つのコミュニティ

生きがい創造教室は、ポジティブ心理学の考え方に基づく、65歳からのライフデザイニングの教室です。少人数のグループで10回のセッションに参加して個別の生き方を考えます。過去の経験をキューブ型の教材を使って振り返ったり、認知行動療法の手法を用いて自己イメージを修正したりします。この教室の修了者が同窓会をされるようになったのが、2つ目のコミュニティであるワンダフル大学院の前身です。

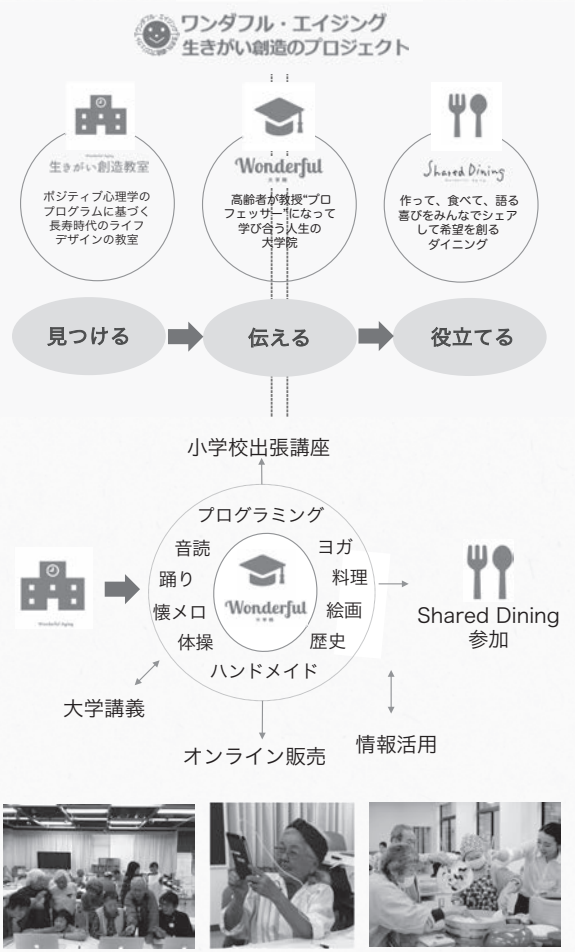
ワンダフル大学院は、「65歳になったらプロフェッサーにな

ろう」をスローガンに、個々の生きがいを他の人に伝える学校です（学校名は呼称で不認可です）。この大学院には現在10講座があり、大学生とシニアがチームになって講座内容を考えます。プログラミングの講座からは、大阪市内の小学校にプログラミング教育の出張講義に出かけたり、今年度には京田辺市の教育委員会と連携して、市内の小学校のプログラミング教育にも協力したりしています。「大学院」のシニアの希望者には、タブレット端末を貸し出し、スマホやSNS利用のサポートをしています。プログラミングの地域連携事業は、女子大学のインターンシップⅡという授業科目と連動しており、大学生の創造性を高める教育の場ともなっています。

この活動を通じて、高齢者のITリテラシーを高め、持続的な地域参加を可能にすること、高齢者の強みを地域に還元し、年を重ねることの良さを大学生や子ども達に伝えることを活動の成果として期待しています。

高齢社会の未来をシニアと若者で拓く

今年度からは、スーパーマーケットの中に、買ってきた食材を調理して食べるスペースを設置し、食を通じた多世代の関わりあいを心理学とテクノロジーの知見を取り入れて促す活動が始まりました。シェアダイニングは、「人に迷惑をかけたくない」と社会から遠ざかった人たちが、再び生きる意欲を高め、他の人とつながり、喜びを感じられるような場を設計し、その場所で多世代が共に高齢社会の未来に希望を創るプロジェクトです。



同志社
クローズ・アップ

美術鑑賞授業の実践
「生活の中のデザイン～色々な椅子～」

中学校・高等学校　塩田侑佳（しおたゆか）

「デザインは使いたくなる人の目に留めさせるようなデザインで、なおかつ機能性にも優れたものを考えることが大切だと思った」

授業の最後、「身の回りで使うものをデザインする（考える）ためには、何が大切と考えましたか？」という問いに対して生徒がレポートに記した言葉である。数年前から、美術への理解を深める鑑賞の授業を奈良教育大学の准教授竹内晋平氏と試みている。美術の鑑賞活動を通して、生徒が理解するべき内容は、美術作品等の表層的な理解にとどまらず、深く学ばせたい美術の特性や意義を考えることを念頭に実践している。

「美術」と言うと生活から少し遠い意識を持つ人も多くないだろう。しかし、広い視野で、普段の生活を見回してみると、私たちは、様々なモノに囲まれている。そして、それらを使いながら日々の生活を豊かにしてきたと言える。それらは、人の手によってデザインされたモノである。

本実践は様々な形状の椅子の鑑賞を通して、身の回りにあるデザインへの興味・関心や考える視点へつなげたいと試みた。

見て、座って、考える

授業では、生活で使用している様々なものの中から、椅子を取り上げ、デザインについての理解を深めることで、「生活で使用するもののデザインで大切なことは機能性であり、それらは美しさも兼ね備えている」ことに気づくことを目的とした。授業は全二次で構成し、十脚のデザインの異なる椅子を用意した。第一次は、椅子に自由に座ってみることから始め、興味のある椅子から順に、なるべく全ての椅子に座るように促した。生徒は五感を働かせ、座り心地、見た目の形や色、感触についてなど、さまざまな言葉で表現していた。

その後、椅子の機能性について確認し、各自が一つの椅子を選んで、それをアピールするキャッチコピーを考えて、手書き、または、ｉＰａｄを使用してＰＯＰ

を作ることにした。自分がその椅子から得るイメージや特徴を言語化することで、デザインの要素に気づく活動である。

第二次では、作成したＰＯＰを椅子の前において鑑賞し、それぞれの椅子の特徴を言葉でも意識しながら、確認し、選んだ椅子ごとにグループを作って発表した。改めて、その特徴を踏まえて椅子に座り、「今回の学習を通して、身の回りで使うものをデザインする（考える）ためには、何が大切だと考えますか？」という問いを考えた。

生徒は、椅子の特徴を言語化することで、椅子にはさまざまな用途があること、機能があること、見た目、色や形が多様であることを理解し、「生活で使用するもののデザインで大切なことは機能性とともに見た目のデザイン性も兼ね備えるものである」ことに気づいた冒頭の生徒の言葉に繋がっていく。

教科書や資料集、その他の画像、映像で、様々なデザインされた椅子を見ることは容易である。しかし、今回、実際に椅子を用意し、座って触れて、そのモノを実感できることで、生徒の気づきは格段に広がることを見せつけられた。実物がそこにあることで、興味関心も、気づきも深くなるのではないだろうか。

日常的に触れること

椅子は、日常的にも座れるように、美術室前のスペースに常にあって生徒は自由に座っている。

友人と楽しそうに座りながら、「この座り心地良い」「こっちのほうがいいよ」「こっちのほうが好き」「これが落ち着くよ」などという会話が聞こえてくる。この何気ない中から、機能性やデザイン性を感じる感覚も大切にできたらと思う。

今後、椅子の種類を増やし、日常的に意識的にデザインされたものに触れる空間を作ることや、椅子以外にも色々な身の回りのデザインを考える授業へと展開していきたいと考えている。

生徒の作ったPOPと授業の紹介を
ポスターにして掲示

鑑賞対象の椅子
エレファントスツール（柳宗理）、ダイヤモンドチェア（ハリー・ベルトイア）、シェルアームチェア（イームズ）、シェルチェア（イームズ）、イケアGUNDE（K Hagberg / M Hagberg）、パントンチェア（ヴェルナー・パントン）、Sプライウッドチェア（アルネ・ヤコブセン）、トライスツール（ショーン・ディックス）、コクヨキャンパスブロック（倉斗綾子他）、内田洋行ミーティングチェア（デザイナー不明）

【付記】

本授業実践に関する成果等については、下記の学会において口頭発表を行った。竹内晋平・橋本（塩田）侑佳「鑑賞的体験の言語化を通した美術の俯瞰的理解Ⅱ　―プロダクトデザインの鑑賞における発問設計とその効果を中心に―」、第41回美術科教育学会 北海道大会（札幌大谷大学）、２０１９年３月

また、鑑賞の対象とした椅子の一部は、大本染工株式会社より寄贈を受けた（滋賀銀行ＣＳＲ私募債による）。記して御礼申し上げます。

同志社クローズ・アップ

理科系クラブ研究発表会

香里中学校・高等学校教諭　古本（ふるもと）　大（ひろし）

２００３年４月12日（土）第１回理科系クラブ研究発表会が開催されました。当時この発表会に参加したのは、生物部・化学部・天文部の３クラブでした。それまでは、文化祭の時に各クラブの展示を観に行き、「こんなことをやっているのか」と知ることはあっても、普段はそれぞればらばらに活動し、互いに何をやっているのかよくわかっていませんでした。私が顧問をしている生物部は、当時活発に研究活動をしており、「学校のセミ」というテーマで何年も高校の生物部研究発表会で発表していました。また、２００１年には日本学生科学賞で入選２等に選ばれ、京王プラザホテルでの表彰式にも出席していました。このようなとき、２００２年４月に私のクラス１年Ａ組に化学部で中心的に活動している生徒が２名入ってきました。そして彼らに「生物部も研究しているのだから、化学部も何か研究して、合同で発表会をやらないか？」と誘いをかけたのでした。その結果、春休みに研究をまとめ、それを発表しようとなり、天文部とともに３クラブでの発表会へとこぎ着けたのでした。

第２理科室での発表風景

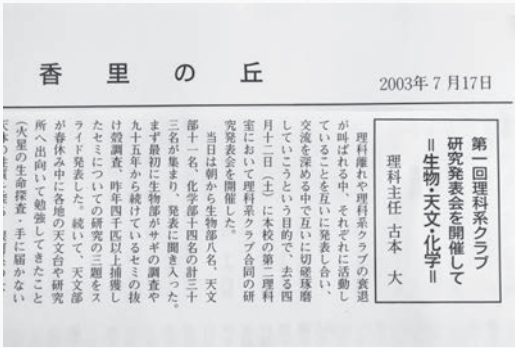
当日の参加者は生物部８名、化学部14名、天文部11名の生徒33名と顧問３名の36名での船出となりました。発表要旨集に残る発表題は、「１．サギ調査」、「２．セミの再捕獲調査」、「３．セミの抜け殻調査からわかること」（以上生物部）、「４．火星の生命探査について」、「５．手に届かない天体の性質を探る」、「６．銀河系の大きさを推測する」（以上天文部）で、化学部が何を発表したのかは記録がありません。翌年２００４年４月10日（土）には第２回発表会が行われ、生徒参加者25名で、「１．太陽黒点スケッチの利用」（天文部）、「２．２００３年度活動報告」、「３．淀川と道頓堀川の水質調査」（以上化学部）、「４．

学校のセミX～調査木調査と再捕獲調査～」、「5．サギ調査Ⅲ」、「6．蒼い海とアカショウビンの棲む島・渡嘉敷」、「7．渡嘉敷の虫物語」（以上生物部）、「8．２００３年火星大接近時のスケッチ」（天文部）の８題が発表されました。これ以後、毎年春休みには1年間の活動を振り返り、研究をまとめて発表することが年中行事となっていきました。初めのうちは土曜日に行っていましたが、その年に大学に入った卒業生も参加できるように、大学が休みの日曜日に開催されるようになり、春休み最後の日曜日が発表会の日に固定されていきました。

発表会が終わったあとには、各クラブ主催（クラブごとに文化が違うので）で、校内で、咲き乱れる桜の元に集まってのお花見バーベキューが行われます。生物部は、野外調査の時に身につけたたき火の技術（マツの枯れ葉や枯れ枝をコンロに敷き詰めて一気に火をつけ、その火を炭に移す）を駆使し、化学部はバーナーを使って炭に火をつけ、天文部はオーソドックスに着火剤を使って火をつけます。それぞれのコンロは時間差はできますが、それぞれ使えるようになっていきます。焼く肉も近所のスーパーで調達したり、安さ命とばかりに業務用スーパーで調達したり、「高級肉を食べよう」とおもしろ半分にグラム１０００円ほどの肉が差し入れられたりもします。こうして、また来年の発表会に向けて何か研究していこう、来年は聴衆を魅了するような発表をしよう、という気になっていくのです。

発表後のバーベキューの様子

そして今年、２０１９年４月７日（日）第17回の発表会が、数年前に復活した物理部も含め、理科系４クラブで開催されました。生物部の「ヤドカリの研究」、化学部の「青銅鏡の研究」、天文部の「美しい天文写真を撮るためには」が、それぞれ継続研究でした。物理部の「研究とは何だろう」も継続されていくことでしょう。この発表会から、研究の楽しさを、身をもって感じ取ってくれればな～と思います。そしていつの日か、世界に羽ばたく研究者が出る日を夢見ながら、この原稿を終えたいと思います。



香　里　の　丘　　2003年7月17日

第一回理科系クラブ研究発表会を開催して
＝生物・天文・化学＝

理科主任　古本　大

理科離れや理科系クラブの衰退が叫ばれる中、それぞれに活動していることを互いに発表し合い、交流を深める中で互いに切磋琢磨していこうという目的で、去る四月十二日（土）に本校の第二理科室において理科系クラブ合同の研究発表会を開催した。

当日は朝から生物部八名、天文部十一名、化学部十四名の計三十三名が集まり、発表に聞き入った。まず最初に生物部がサギの調査や九十五年から続けているセミの抜け殻調査、昨年四千匹以上捕獲したセミについての研究の三題をスライド発表した。続いて、天文部が春休み中に各地の天文台や研究所へ出向いて勉強してきたこと（火星の生命探査・手に届かない

第１回発表会を記念して、PTA新聞の「香里の丘」に記事を掲載してもらった。

同志社クローズ・アップ

スキー学舎

女子中学校・高等学校教諭　平岡隆一（ひらおかりゅういち）

1．はじめに

本校では、１９５０（昭和25）年から夏季学舎（琵琶湖で水泳）が開始され、１９５１年には妙高登山も開始されるようになりました。夏季学舎が充実して行われる中で、冬季休暇中に実施できるものはないかということで、スキー学舎が考えられました。スキー学舎は、１９５７年に3泊4日の日程で、野沢温泉スキー場で生徒24名の参加で始まりました。それから約60年間続く学校行事となっています。始まった当時から大切にされてきたことは、「スキーを通して、学園内では身につけることのできない大自然との触れ合いからさまざまな自分を発見すること」、「寝食を共にした集団生活の中から友人同士のつながりを感じること」です。

現在は高校1年生を対象に希望者約90名と教員14名の参加を基本とし、3月に4泊5日の日程で、北志賀高原竜王スキーパークで実施をしています。宿舎の限界収容人数により、希望者がこれを上回る場合、抽選で参加者を決めます。２０１８年度のスキー学舎では、募集を大幅に超える１３５名の申込みがあり、抽選により生徒１０５名の参加で実施をしました。

2．講習班について

本校のスキー学舎では、参加者を初心者班、初級班、中級班、上級班に分けて、本校の教員のみで講習を行います。班分けは、事前にアンケート（技能調査）を行い、それに基づいて分けます。技能調査の内容は次の通りで、該当するものに〇をつけてもらいます。

ア．スキーで平地を歩くことができる
イ．階段歩きで斜面を登ることができる
ウ．スキー板を逆ハの字にして斜面を登ることができる
エ．リフトにひとりで乗り降りができる
オ．スキーで平地をスケーティングすることができる
カ．緩やかな斜面で，スキーをハの字（プルーク）にしてまっすぐ滑り，スピードをコントロールしたり，しっかりと止めたりすることができる
キ．緩やかな斜面で，スキーをハの字（プルーク）にして左右にターンして滑る（プルークボーゲン）ことができる
ク．急な斜面でも，カやキの技術ができる

ケ．緩やかな斜面で，スキー板を平行（パラレル）にして左右にターンして滑ることができる
コ．急な斜面で，スキー板を平行（パラレル）にして左右にターンして滑ることができる

上級班（ケ・コまで○）、中級班（カ・キ・クまで○）、初級班（エまで○）、初心者班（○がない）をこの技能調査の結果により決定し、合わせて教員の担当班を決めます。スキー経験者の人数により年によって各班の数は異なります。２０１８年度は、上級班（生徒21名・教員２名）、初中級班（生徒24名・教員３名）、初心者班（生徒15名・教員２名）が４班となりました。

3．スキー学舎内容

初日はスキー場までバスで移動、宿舎に到着後、開舎式を行います。開舎式では、スキー学舎の心得、意義などを再確認します。開舎式後、ブーツ合わせやスキー板の準備などを行い、講習に備えます。

２日目の午前（９時～12時頃）から講習が始まります。技能調査に基づいて分けられた班に分かれ、担当教員の指示に従います。初心者班は、板の履き方や脱ぎ方、片足だけ板を付けて平地を進むなど基本的なことを繰り返し、スキーに慣れていきます。その他の班は、リフトに乗り、実際にどれくらい滑れるのかを担当教員が確認し、レベルに合わせた講習を開始していきます。午前の講習を終えると、宿舎に戻り昼食をとり、午後（13時30分～16時30分頃）の講習になります。３日目と４日目の午前まで各班で講習を行い、４日目の午後は指定されたゲレンデで、フリー滑走となります。フリー滑走では、講習班以外の生徒や教員と自由に滑り、楽しい時間を過ごします。初心者班からスタートした生徒達もこの時には、スキーを楽しめる滑りができるようになっています。

５日目は、朝に閉舎式を行い、学校まで再びバスで移動し、学校到着後解散となります。

4．終わりに

スキー学舎に参加する生徒は意欲的で、とても活き活きとした姿を見せてくれます。最近は、スキー経験者が減少傾向にあり、スキーを初めて経験する生徒が増えています。これは、スノーボードの普及、様々なレジャーが存在するようになったことなど理由は様々だと思います。こういう状況の中で、本校の60年以上も続くスキー学舎は、益々意義あるものになっていると感じています。このスキー学舎を継続していくために、教員の技術力向上のための研修制度の充実、次世代の教員への引き継ぎ、スキー場における安全対策の強化など、様々な課題をクリアしていくことが大切だと考えています。

写真１．開舎式の様子

写真２．講習の様子

写真３．食事の様子

Science, Literature, the Arts, History and Social Studies, but the students need to understand how each part of the curriculum relates to the whole, rather than simply memorising one or two subjects.

In 2018 we were asked to host the Kansai Round and home advantage helped to swell our numbers to a total of 48 students at Kansai, 43 students enjoying the excitement of Kuala Lumpur, and finally 22 students in attendance at Yale University for some early November snow. This year saw 27 Doshisha International students compete at Kansai and then Beijing. As the competition grows, the numbers become even more staggering. This year 50,000 students from around the globe took part in regional rounds. The Beijing Global Round hosted 3,500 and there are also Global Rounds in Sydney, Manila, Astana, Durban, and The Hague.

In Beijing our students saw an incredible keynote speech from slam poet Alex Dang, climbed the Great Wall of China, were entertained by phenomenal talent at the Scholar's Show (featuring a note perfect version of Bohemian Rhapsody by a Slovenian scholar), danced all night at the Scholar's Ball, and exchanged cultures and friendships with a bewildering list of nationalities. We also registered another first as one of our Junior students was chosen to debate in front of an audience of 2,000! On the final day the awards ceremony of 2018 was fresh in my mind; the joy of the qualifiers and the tears of those who just missed out. What was ultimately uplifting was the sight of all 27 of our students qualifying to attend Yale in the autumn, as part of the top 2,000 students worldwide. In addition to this I received the award of "Coach of the Year"; despite what the students may say, the award is down to their endeavours far more than my own.

The competition has provided our students with challenges to overcome, motivation to learn rather than simply 'study', and a truly global outlook as they move forward; an environment where they truly can "travel together from a starting point of difference". I'm sure at least one Japanese historical figure would be proud.

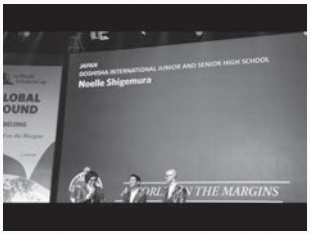
同志社
クローズ・
アップ

SCHOLARS OF THE WORLD, UNITE!

国際中学校・高等学校教諭　Simon GODDARD WEEDON

Where can you find 3500 students from 50 different countries all gathered in the same place? Where would you find 3500 students willingly spending 5 days engaged in debate, creative writing, intensive tests and team quizzes? The answer to both of these questions is the same: The World Scholar's Cup Global Round in Beijing.

Before we get to China, however, it is worth a quick recap of Doshisha International's participation in the competition. Back in 2016 three students approached me about entering an English language based competition held in Osaka. They qualified for the next stage and I accompanied them to Bangkok for my first experience of The World Scholar's Cup. The opening ceremony was a three-hour extravaganza of pulsating music, jokes, speeches, and a keynote speech from an internationally renowned author. The debates, writing and challenge exam took place on a university campus where I judged three back to back debates of excellent quality.



The following year we took 24 students to the Kansai Round, 21 to the Global Round in Hanoi, and 9 students on our first journey to the final Tournament of Champions held at Yale University in November each year. The Yale round sees only the top 1000 students in both the over-15-division and under-15-division compete at the highest level, and it is evidence of the immense dedication of our students that they have risen to this challenge. To truly understand the demands of the curriculum, many students compare it to adding a whole two extra subjects at school. The six subject areas cover

特別寄稿

前川道介氏の「言葉」

澤田瞳子（同志社大学文学部文化史学専攻卒業、
同大学院文学研究科博士課程前期修了）

私の手元にいま、一冊の本がある。奥付は一九七四年五月十五日、東京の出版社・創土社より刊行された『刺絡・死の舞踏』という短編集である。

著者は二十世紀前半にドイツ・チェコなどで怪奇小説を多く執筆した、カール・ハンス・シュトローブル。翻訳者は同志社大学教授（当時）・前川道介。シュトローブルは現在の日本ではほとんど忘れ去られているが、かつては彼とほぼ同時代を生きた森鴎外の翻訳によって、日本に紹介されたこともある作家である。

私がこの短編集を初めて手にしたのは、高校時代。同志社女子中高の図書室でのことだった。当時、私は勉強よりもとにかく本が読みたくてしかたがない高校生で、図書館の本を片っ端から読破していたが、好むのは日本文学が原則で翻訳小説を進んで手に取ることは稀だった。

そんな中、著者にも翻訳者にもまったくなじみがなく、黒字に銀でタイトルと小さなイラストが施されているだけの地味な装丁の本を何故読もうと思ったのか。それは今でも分からない。ただフランス革命に題材を取ったと思しき「首」、当時の当世医学生気質に怪奇的要素をからめた「死の舞踏」など、それまで読んできたホラー小説とはまったく異なる現実と恐怖をない交ぜとしたその筆致に、十代の私は愕然とした。

もっとこの作家の作品を読みたい。そう思ったが、調べてみればシュトローブルの作品の大半は本邦では未翻訳で、読むことができるのは『刺絡・死の舞踏』の一冊だけとわかった。

世の中には自分の読んでいない小説が、まだまだ山のようにある。初めて知った作家の作品によって、小説世界の広大さを思い知らされ、私は打ちのめされる思いがした。以来、進んで未知の作家の作品を読み漁るようになったが、シュトローブルのような衝撃を受ける作家はそんなに多くなかった。

翻訳者のプロフィールに従えば、訳者・前川道介氏は同志社大学教授という。系列である同志社女子高校に身を置きながらも、まだ少女であった当時の私は、まだ自らの母校にさして関心を抱けなかった。それだけにこれほど鮮烈な印象を与えてくれた短編集の訳者が同志社大学教

授という事実は、己が属している学校に対して誇らしさを覚える初めてのきっかけとなった。いわば私はシュトローブルの短編集と前川道介氏の存在によって、母校たる「同志社」について初めて思いを馳せたのである。

ただ、その後、高校を卒業し、同志社大学に入学したものの、前川道介氏は一九八九年三月三十一日を以て同志社大学を退職なさってらっしゃり、お目にかかることは叶わなかった。折りしも私が同志社女子中学校に入学したのが同年四月一日であるから、私と氏は「同志社」の中では一度も重なり合う時期を持たなかったことになる。

「同志社外国文学会研究」五三号（一九八九年三月）には、本岡五男氏の「前川先生を送るにあたり」、前川道介氏の自叙伝とも呼ぶべき「記憶の残像」が所収されている。それらに従えば、前川氏は一九二三年京都市生まれ。家族で大連に移住し、京都大学入学のために帰国。ドイツ文学を学ぶも召集を受け、終戦後に復学。大阪の私立医大を始め、複数の大学で講義を持ち、一九六七年四月より同志社で教鞭を取っていらしたという。

「同志社外国文学研究」五五号（一九九〇年一月）には、一九八九年三月二十四日に平安会館で開催された前川道介氏の退職記念講演「<Unbeliebtheit>ということ」が全文収録されている。ここにおいて氏は、詩人・ゲーテが知人であるプレッシング教授に対して抱いた違和感を例として、文学者であるとは何かを語っていらっしゃる。

この講演録は同志社大学学術リポジトリでも全文公開されているので、言葉、そして文学に少しでも関わっていらっゃる方には、ぜひお読みいただきたい。言葉を扱うとはどんな意義ある仕事か、第二外国語研究室の使命とは何か。戦後日本の経済復興至上主義と、その中でおざなりにされてきた「言葉」を「人間文化一切の基盤であり、出発点」と断言する氏の意見が、三十余年を経た現在においても色あせぬ鋭さを有している事実に、読者は必ず驚愕なさるはずだ。

現在、私は小説家として、「言葉」を生業としている。前川氏が講演の中で語られた「言葉への忠誠心」を自らが抱けているか、それは正直、自信がない。しかし氏の訳された短編集によって文学世界の広大さを知った自らを省みたとき、前川氏が同志社大学を去られるにあたって残された以下の言葉を、重く受け止めずにはいられないのである。

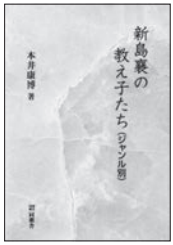
「敬愛する諸姉諸兄　Meine Kolleginnen und Kollegen!!

言葉（ことのは）に忠誠を誓う同志として世の Unbeliebtheit（アウフベベン!!）を恐れず、逆にそれを止揚して私的にまた公的に真に敬愛される存在となるべく努力しようではありませんか」

澤田瞳子（さわだ・とうこ）

【2002年大学院文学研究科文化史学専攻博士課程（前期課程）修了】

1977年生まれ、京都府出身。大学院での専門は奈良仏教史。
2011年『孤鷹の天』で第17回中山義秀文学賞を最年少受賞。『満つる月の如し 仏師・定朝』で第32回新田次郎文学賞などを受賞。『若冲』で第９回親鸞賞受賞。他の著書に『火定』『落花』などがある。近著は『名残の花』。



同朋舎
4,200円（税抜）

新島襄の教え子たち（ジャンル別）

本井康博（もといやすひろ）（元大学神学部教授）著

取り上げたい教え子が、総勢180名を超えたので、2巻に分け、前巻を「ジャンル別」（本年2月刊）、後巻を「出身地別」（本年8月刊）と区分した。

本書（前巻）では約60名を便宜的に活動領域や出身・帰属団体別に10組に分けて紹介した。以前、『同志社山脈　113人のプロフィール』（晃洋書房、2003年）を編集した時の技法を踏襲してみた。

すなわち、神戸バンド、熊本バンド（バイブル・クラス）、同（同心交社）、邦語神学科（別科神学）、早稲田大学（移籍組）、東華学校（同志社仙台分校）、日本女子大学（移籍組）、同志社派（社会福祉）、北海道バンド（同）、クリスマス・ツリー（植樹組）の10組である。熊本バンド以外にも、同志社独自の特異な集団が多彩な活動を展開したことを広く知ってもらえればと願う。

本書ではそうした個人の履歴や集団の業績だけでなく、新島との関係が窺える記録や回想をも重視した。

司馬遼太郎は、西郷隆盛を論じた際に、本人自身のことを書くよりも、彼を知る「先人」の評を紹介するほうが隆盛を読者にありありと伝えられる、と述懐する。

新島の謦咳に触れた教え子は、例外なく強烈なインパクトを受けたという。新島が、「人ひとりは大切」をモットーに彼らを遇したからであろう。

教え子たちが披歴する恩師の消息や体験談は、新島の稀有な学生愛の発露を現代の私たちに生々しく示してくれる点で、新島評伝の1頁に立派になりえるであろう。

著者より

集英社
820円（税抜）

「通貨」の正体

浜矩子（はまのりこ）（大学ビジネス研究科教授）著

通貨はなぜ通貨なのか。それが本書のテーマだ。実をいえば答えは簡単だ。通貨は、それが通貨だと我々が認知した時に通貨になる。人々が通貨だと見なすのであれば、石ころでも、貝殻でも、クマさんのぬいぐるみでも、何でも通貨になる。逆に、いくら立派な紙幣でも、それを人々が通貨とみなしてくれなければ、通貨ではなくなる。その意味で、全ての通貨が実は仮想通貨なのである。

このような「通貨の正体」を、本書では可能な限り多面的に、そして歴史的視点から追求しようとした。そのための発見の旅に出たら、その過程で、筆者は実に様々な出会いを体験した。「鏡の国のアリス」に出て来るセイウチと牡蠣の赤ちゃんたち。落語に登場する目黒のサンマ。IMF（国際通貨基金）体制の成立に至る論戦に命をかけたイギリスのジョン・メイナード・ケインズとアメリカのハリー・デクスター・ホワイト。慶長小判を質に入れた奇人作家の内田百閒。実に楽しい旅だった。

江戸の庶民は、通貨を「天下の通用」と呼んだ。何と賢いネーミングであることか。その通りだ。通貨は天下に通用するから通貨なのである。天下に通用する存在として、どこまで人々の信頼を勝ち取るか。そのことによって、通貨の通貨性が決まる。かくして、通貨の正体の根底には、人間と人間との信頼関係がある。その意味で、通貨はとても人間的な存在だ。通貨から人間性が消えないよう、人間たちが常に注意しておかなければならない。

著者より

商事法務
3,600円（税抜）

信託法をひもとく

佐久間毅（大学司法研究科教授）著

信託は、イギリスやアメリカで発展した制度です。英米は、判例法が支配する国ですが、判例法であってもその原則には、厳格で、柔軟性に欠ける面があります。そこで、個々の事案において、当該事案の特殊性を重視した衡平（エクイティ）に基づく救済が認められるようになりました。やがて、その種の救済事例が集積し、そこに原則とは異なる法準則（衡平法）が形成されるに至りました。英米において、この衡平法の代表的なものが、信託に関する法です。

信託はわが国にも導入され、大正10年に信託法の制定、平成18年には信託法の大改正が行われました。ところが、わが国は、英米と異なり制定法主義をとる国であり、信託に関する法準則に、衡平の見地から民事一般法（たとえば民法）の準則の厳格さや硬直さを修正するという特徴はありません。売買という制度のために売買に関する規定があるように、信託という制度のために信託に関する規定が設けられている、というのが実情です。そうであるのに、信託の由来の故か、わが国の信託に関する法準則が、英米での信託観念や法準則を参照して説かれることも珍しくありませんでした。その結果として、平成18年改正後の信託法にも、理解することが難しい規定が少なからずあるように私には思えます。

本書は、信託法の制度や規定に関して私が疑問や違和感を抱く問題をいくつか取り上げ、その問題がわが国の私法体系の下でどのように位置づけられ、あるいは解釈されるべきかを、私なりに示そうとしたものです。

著者より

風間書房
6,500円（税抜）

現代韓国を生きる若者の自立と親子の戦略

―文化と経済の中の親子関係―

尹鈔喜（大学社会学部准教授）著

本書は、急速な経済成長と民主化による文化変動という「圧縮された近代」を経験した韓国社会を対象に、その社会的矛盾を象徴する、若者たちが直面する自立の困難と親子の葛藤について、家族社会学的な解明を行い、その解決の方途を明らかにしたものである。

韓国の若者の自立は、進学・就職・結婚というライフイベントと強く結びつけられており、親の意向は若者の希望を排除してまでも優先される傾向が存在する。このように親の意向が優先されるのは、韓国社会が経験した急激な社会変動によって、親世代が若者世代とは全く異なる文化・経済的な生活史を背景としていることが根拠となっている。また若者たちは、親の干渉を受動的に受け入れているのではなく、若者の自立を可能にする家族政策がほとんど存在しない韓国社会を生きるために、戦略的に親の意向を受容しているという側面が存在する。しかしながら、こうした親子の戦略の産物として達成される若者のライフイベントの経験は、若者たちから生きる力を徐々に奪っていく。

若者の経済的自立が容易ではない韓国社会の中で、その問題の解決が親子の内部に閉じられた形で解決されようとする時、時に親子関係は破綻し、時に若者は生きる希望を見失っていくのである。それゆえ、韓国における若者の自立の困難と親子の葛藤の問題を解決するために、若者が家族に頼らない形での自立を可能にする家族政策を備えた、新たな韓国社会の未来像が必要なのである。

著者より

三元社
7,400円（税抜）

詩画制作論の系譜

伊達立晶（大学文学部教授）著

歴史的に見れば、西洋の詩と絵画は古典主義やロマン主義、シュルレアリスムなど共通の芸術運動のもとで制作されたものであり、それぞれの時代精神を分かちもっていることはまちがいない。だが現在、詩は国ないし言語ごとに分かれた文学研究で、絵画は美術史学で研究されるのが一般的である。このように分科した学問体制ではそれぞれの運動を総体的に捉える視座は失われ、相互の影響関係も見失われてしまっているのではないか。こうした問題意識に基づいて本書は書かれている。

詩と絵画とを制作論史という観点で見直すとき、古代ギリシアから現代に至る思想的系譜が見えてくる。本書ではまず、プラトンによるイデア論や詩と絵画に関する模倣論が口誦文化と文字文化とのせめぎ合いの中で成立した可能性について考察する。そしてイデアを模倣するという新たな制作論がキケロによって主張され、それが17世紀のベッローリを経て古典主義に継承されることを確認する。一方ベッローリの制作論はドライデンの詩画比較論を通じて独創性を重視する制作論に転換され、シェイクスピアをめぐる18世紀の批評を経てコウルリッジのイマジネーション論を生み出すことも確認できる。この制作論がポー、さらにはボードレールやマラルメの詩論・絵画論を経て、19世紀後半以降の多様な芸術思潮を生み出していくのである。看過されてきた広大な研究分野だけに、本書は数多くの発見的成果を世に問うものとなろう。

著者より

中央公論新社
860円（税抜）

大統領とハリウッド
―アメリカ政治と映画の百年―

村田晃嗣（大学法学部教授）著

19世紀末にアメリカが世界一の工業大国になった頃、映画が登場した。また、内政、外交の双方で大統領の役割が拡大し、現代大統領制が台頭した。つまり、強いアメリカ、強い大統領と映画は、ほぼ同時に誕生したのである。以後、映画はもっともアメリカ的な大衆文化になった。さらに、共通の神話を持たないアメリカでは、映画が擬似的な神話の機能、国民統合の機能を果した。

映画が最も頻繁に描いたのは第16代大統領エイブラハム・リンカーンである。何しろ、アメリカ史上最大規模の戦争である南北戦争の指導者であり、史上初めて暗殺された大統領だったからである。その後も、ハリウッドはフランクリン・D・ローズヴェルト大統領の登場を応援し、戦後も若くハンサムなジョン・F・ケネディや陰険なリチャード・ニクソンらを繰り返し描いてきた。総じて、ハリウッドはリベラルであり、民主党の大統領を支援してきた。

もちろん、映画は数々のフィクションの大統領も描いてきた。銀幕の中では、早くから黒人の大統領や女性の大統領が登場していたのである。冷戦後には、映画はしばしば大統領のスキャンダルやプライバシーを描くようになった。今では、ドナルド・トランプ大統領は映画以上に刺激的で、ほとんどプロレス的な政治と外交を展開している。

こうした政治と文化の関係、大統領とハリウッドの関係は、アメリカ政治理解に新たな視点を提供しよう。

著者より

勁草書房
3,000円（税抜）

アベノミクスの成否

佐竹光彦（大学経済学部教授）他編著
北坂真一（大学経済学部教授）
川口章（大学政策学部教授）
三好博昭（大学政策学部教授）他著

日本経済政策学会の第75回全国大会が2018年5月26日、27日の2日間、同志社大学今出川キャンパスで開催されました。時々の話題となっている経済政策を共通論題として掲げ、講演とパネルディスカッションが1日目に行われます。この大会から、共通論題で行われた講演とパネルディスカッションをまとめ、さらに、経済政策展望を加えた一般読者向けの読み物が、日本経済政策学会叢書として出版されました。

今回のテーマ「安倍政権における経済政策（アベノミクス）の評価と今後の指針」の下で、5年間実施されてきたアベノミクスの旧3本の矢の二つ、「大胆な金融政策」と「機動的な財政政策」を理論・実証研究を踏まえた評価と、現状と課題および方向性を示した、それぞれ2本の講演が収められています。また、第三の矢である「民間投資を喚起する成長戦略」については、多岐にわたる政策の中から、「働き方改革」と「自動運転」への技術開発という2つのテーマについて、今までの動きと将来の方向性を概観した章を設けています。今後の財政金融政策と、労働・技術の2つの改革を考察するうえで、最良の参考書となるでしょう。

さらに、経済政策展望では、電力システム、原子力、再生可能エネルギーの3つエネルギー政策について、動向と展望を解説し、東日本大震災以来迷走しているエネルギー政策に指針を与えており、今後のエネルギー政策の是非を判断する拠り所となることを期待しています。

編著者より

中央経済社
3,300円（税抜）

グローバル研究開発人材の育成とマネジメント

―知識移転とイノベーションの分析―

宮本大（大学経済学部教授）他著

本書は早稲田大学の村上由紀子教授をリーダーとした研究プロジェクトの成果として刊行されたものである。

今日、海外の有用な知識を取り入れるために、海外の組織や研究開発者と共同するなど、研究開発のグローバル化が進んでいる。しかし地理的に離れ、文化や経済社会制度の異なる国々の間で共同研究開発を首尾よく行うためには、国内共同研究開発とは異なる人材マネジメント上の課題があると考えられる。そこで本書は、グローバル研究開発の中でも、本社と海外子会社の間で、また、海外子会社間で知識を移転し共有しながら、新製品、新技術の開発と研究に取り組んでいる日系多国籍企業の共同研究開発を対象とし、そこでの人材マネジメントについて考察した。

本書ではR&D拠点を単位とした分析と、研究開発者個人やチームを単位とした分析を通じて得た研究結果を「研究開発者に求められる能力」「海外派遣者のHRM」「外国人研究開発者の雇用」「MNC内でのHRMの独自性と統一」「研究開発者の社会関係資本と人的資本の形成」「外部知識の獲得と職場内の共有」そして「研究開発チーム内の多様性」という点にまとめ、「研究開発者個人の行動が、どのようにして組織を単位とした知識創造に転換されるのか」というブラックボックスの部分に対する一定の知見を提供している。

研究者のみならず実務家に向けて執筆したものであり、研究開発マネジメントに興味をお持ちの方々にぜひご一読いただきたいと思う。

著者より

音楽之友社
2,500円（税抜）

ハーモニー探究の歴史
―思想としての和声理論―

大愛崇晴（大学文学部准教授）他著

音が「ハモる」とは一体どのような事態を指すのでしょうか？　専門家からは、「音どうしの周波数の比が…」とか、「主要三和音とは…」といった答えが返ってきそうです。しかし、この問いには決まった正解があるのでしょうか？　そんな疑問を解くヒントが本書にはあります。

編著者である西田紘子さん、安川智子さんは、私と同じく、ともに一般の大学で音楽学を教えていて、理論的な内容も扱います。日頃から「音大で使われるような専門用語をなるべく使わずに授業しているはずなのに、学生たちに説明が伝わっていない」と感じた経験が本書の出版に至ったきっかけだそうです。本書は序章と八つの章からなり、古代ギリシャから二十世紀に至るまでの西洋の音楽理論家たちによるハーモニー（協和音・和声）についての考え方を、五人の専門家ができるだけわかりやすい言葉で解説します。時代ごとに、国ごとに、さまざまにうつり変わるハーモニーの「美しさ」の多様性を知ることで、読者がより幅広い視野で音楽を捉え、より豊かな音楽の楽しみ方ができるようになれば…というのが著者一同の思いです。

本書の構成にあたっては、音楽の知識がない人にも読みやすいようにするために、さまざまな配慮がなされ、ビートルズなどの一般になじみ深い曲も例として出てきます。また、章の間には「コーヒーブレイク」と題したコラムが挿入されていて、興味深いトピックが対話形式で紹介されます。

皆さんも本書とともに、ハーモニー探究の歴史の旅をご一緒しませんか。

著者より

京都大学学術出版会
3,800円（税抜）

50年目の「大学解体」20年後の大学再生
―高等教育政策をめぐる知の貧困を越えて―

佐藤郁哉（大学商学学部教授）編・他著

1991年の「大学設置基準の大綱化」に始まる大学改革に関する施策の多くは期待外れの結果に終わってきました。それどころか、大学現場を疲弊させることによって事態をさらに悪化させてきた例さえあります。その意味では、過去30年に及ぶ改革政策は明らかな失敗ないし「失政」だったと言えます。日英の共著者5名によって書かれたこの本の主な狙いの一つは、そのような大学改革の失敗の背景について、日本の文教政策が抱える問題点を検討していくことに加えて、英国の研究政策との比較を通して明らかにしていくことにありました。

本書は、5年以上にわたる共同研究の成果としてまとめられたものです。その共同研究の代表者であった私自身の個人的な問題意識の根底には、米国での留学生活を終えて日本の大学につとめるようになって以来感じてきた、どうしようもない違和感があります。この30年のあいだに日本の大学に導入されてきた「改革小道具」には、米国由来とされるものが多数含まれています。しかし、その中にはオリジナルとは似ても似つかぬ「偽物」としか言えないものが少なくないのです。それは、たとえば電話帳式の「シラバス」だったり、数合わせのようにしておこなわれるFD（ファカルティ・ディベロップメント）だったりします。

それらカタカナ言葉やアルファベットの頭文字で紹介される改革施策の多くは、大学現場の内在的な関心や必要性とは無縁の借り物に過ぎません。本書は、「なぜそのような不条理がまかり通ってきたのか」という問いに対する私なりの答えを提示してみたつもりです。

著者より

創元社
4,500円（税抜）

近代日本のメディア議員

―「政治のメディア化」の歴史社会学―

河崎吉紀（かわさきよしのり）（大学社会学部教授）他編著

選挙や世論に及ぼす報道の影響など、今日、政治家はメディアの動向を無視できなくなっている。読者や視聴者の最大化を目指すメディアの論理が、メディアの枠を越えて政治の制度、組織にまで影響力を強めていくプロセス、すなわち、「政治のメディア化」が進行している。こうしたなか、従来の研究はメディアと政治の関係を紙面や番組といった内容を中心に考察してきた。対して本書は人材の輩出という点に着目する。メディア関係者自らが国政に乗り込んでいくという事実もまた、メディアと政治の関係を捉えるうえで重要であると考えるからである。古くは『新潟新聞』主筆を勤めた尾崎行雄や、『郵便報知新聞』で記者を経験した犬養毅など、キャリアの出発点においてメディアに関係した政治家がいる。また、ジャパンタイムズ社長だった芦田均や、東洋経済新報社長の石橋湛山はのちに首相となっている。

そこで、本書では、メディア業界に関連する議員を、第1回総選挙から第39回総選挙まで100年間において洗い出し、議席に占める割合やその変遷を数量的に明らかにした。また、長野県や九州など地域を単位とした分析、ジェンダーや海外経験など個別のテーマにおける検討も行った。研究は京都大学の佐藤卓己先生を中心に、私と同世代の研究者、そして若い研究者の共同作業として進められた。研究合宿で熊本、長野、鹿児島を訪れ、新聞社などを訪問したことが良き思い出となっている。

著者より

ナカニシヤ出版
2,300円（税抜）

サイレント・マジョリティとは誰か

―フィールドから学ぶ地域社会学―

轡田竜蔵（くつわだりゅうぞう）（大学社会学部准教授）他著

ポスト工業社会においては、ハードな地域開発よりもソフトな「地域貢献」「まちづくり」に関わる能動的ないし創造的な人材が脚光を浴びることになる。その一方で、20―30代のうち、いかなる地域活動・社会活動にも積極的に参加していない層は約7割と多数派を占めているという社会調査もある。スピードのある変革が求められる時代にあって、地域や社会の動きに翻弄されているだけで、受動的にしか関われていないという人々の感覚の背景には何があるのだろうか。

本書は、「サイレント・マジョリティ」をキーワードに、現代日本、あるいは東アジア社会の地域の片隅を生きる「忘れられた人々」のリアリティに焦点を合わせた論文集である。

グローバル化する世界のなかで、停滞する地域社会・社会の現状への不安や不満がくすぶっていることは確かであり、それが排外主義的現象を帰結することも危惧されるところである。そんな中にあって、本書の各論考は明確な政治的意思に基づく行動よりも、むしろ、そうした感情の渦巻く背景にある、地域社会の日常的なあり方に注目している。著者たちはいずれも社会学理論を背景にしたタフなフィールドワーカーであり、まちづくりの核心にいる少数のアクターへのヒアリングから地域社会の現実をきれいにまとめるような手法を好まない。本書では、一歩進んで、その地域のなかで必ずしも目立った存在ではない多様な社会的属性の人々に取材をし、「もう一つの地域社会」の風景を描き出すことによって、不可視化された現実に迫る方法の重要性が強調されている。

著者より

岩波書店
1,900円（税抜）

朝鮮半島 危機から対話へ
―変動する東アジアの地政図―

太田修（大学グローバル・スタディーズ研究科教授）他著

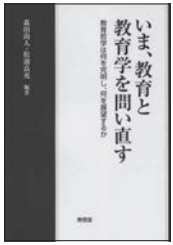
第3回目の米朝首脳会談は、韓国と北朝鮮を隔てる軍事境界線上にある板門店でG20大阪サミット直後の2019年6月30日に電撃的に開かれた。会談は短時間で双方の宣伝に終わったと日本の大手メディアは伝えたが、現職の米国大統領が北朝鮮の地に足を踏み入れるのは史上初めてのことで世界を驚かせたことは否定できない。

一方、日本の安倍首相は、目立った成果がなかったとはいえサミットを仕切って「世界の真ん中で光り輝く日本」を演出したはずだった。ところが一転、世界の眼は板門店の軍事境界線をまたいで満面の笑みを浮かべる米朝首脳に向けられたのである。日本が「蚊帳の外」だったことがふたたび露呈した瞬間だった。

それはともかく、会談でトランプ大統領は対北朝鮮経済制裁を維持するとしつつも協議のある時点では制裁を緩和する可能性も示唆したとされる。2017年から2018年にかけて朝鮮半島をめぐって世界に生じた大転換は今日も続いていることを示す出来事だったのだ。

本書は、その大転換の様相を、北朝鮮、韓国、米国、中国、日本の視点から論じたものである。とりわけ、日本はどのような方向に進むべきか、大転換とは何を意味するのか。「世界を「現実的」に見つめ直すために不可欠な論点を提示」している。執筆者は、李鍾元、木宮正史、平井久、文正仁、尾形聡彦、朱建栄、田中均、太田昌克、太田修。

著者より



東信堂
3,200円（税抜）

いま、教育と教育学を問い直す
―教育哲学は何を究明し、何を展望するか―

小野文生（大学グローバル地域文化学部准教授）他著

教育の実践にとってどうしても必要なものは何か。すぐに浮かぶ答えの一つは、「技術」かもしれない。たしかに、子どもに意図的にはたらきかけ、成長や発達を促すという典型的な教育イメージにおいて、そのはたらきかけとして目的合理的な技術を教育実践の本質的要素に数えるような理解は、けっして特別なものではない。ましてや、ひどく限定的な「役立つこと」ばかりを追求する機能主義に覆われつつある現代社会においてはなおさら、教育は技術的合理主義や道具的理性と親和的になる。しかし、教育の実践にとって必要なものは技術だけか、教育の原理は結局のところ技術知に還元できるのか、と問い直すなら、答えは「否」。教育というできごとには技術や技術的合理性を溢れ出てしまうものがあり、よくよく吟味すればそうした技術知を溢れ出てしまうものにこそ教育は支えられていることがわかる。拙論ではそれを「パトスの知」と名づけ、思想史的な背景や現代の教育哲学研究の理論的達成を確認しつつ、人間の生や経験のもつ固有の「弱さ」や「もろさ」、「不完全さ」や「ままならなさ」に支えられた知から教育（学）を構想すること――「強さ」に反転させようとしないで「もろい部分にたつ」こと――を試みている。拙論のほかに、本書には大学教育、教育と福祉、世界市民形成論、国家と教育、教育政治学、記憶の教育学、理論・実践関係の省察など現代の教育学を見通すうえで重要な論考が並んでいる。専門領域の如何を問わず（本書のタイトル通り）教育と教育学を問い直してみたいという方に、ぜひ手に取っていただきたい。

著者より

岩波書店
2,600円（税抜）

芥川龍之介選 英米怪異・幻想譚

藤井光（大学文学部教授）他訳

芥川龍之介は、作家としては国内ではもはや説明も不要なほどの存在だといっていい。ただし、「作家としては」と書いたのは、芥川に英語の教員という経験があり、洋書を読み漁っていたという面は、作家活動に比べればあまり知られていないからである。

その芥川には、1924年から翌25年にかけて、英米の短編を中心とした51作品を選んだ全8巻からなるシリーズがある。芥川の驚異的な読書量と、英米の新しい文芸を紹介しようとする野心を垣間見せているだけでなく、H・G・ウェルズやオスカー・ワイルド、アンブローズ・ビアスの作品など、21世紀の今から振り返ればまぎれもない古典も多く含まれ、その審美眼の確かさを証言する仕事である。

ただし、英文の作品を掲載したのみで注は一切なし、という不親切なつくりも手伝って、このシリーズはさしたる話題を呼ぶことのないまま、歴史に埋もれていた。そこに光を当てたい、と気鋭の芥川研究者・作家である澤西祐典が発案し、米文学研究者・翻訳家である柴田元幸の二人で短編を選りすぐり、第一線の文芸翻訳者が一丸となって訳出した。それが本書である。

オリジナルのシリーズとは打って変わって、21世紀版は澤西による作品紹介、芥川自身がイエーツやルイス・キャロル作品につけた翻訳も収録するなど、サービス精神に溢れたつくりであり、隅々まで楽しめる本になっている。

著者より

勁草書房
3,200円（税抜）

認知症と医療

日下菜穂（女子大学現代社会学部教授）他著

高齢化社会の到来と共に、地域で暮らす認知症の人も多くなっています。通常、医療は病気を診断したり、治療したりするのが役割ですが、認知症は社会生活に影響が出る病気であり、地域生活を継続するための仕組み作りやどうケアしていくかも医療の重要な役割です。本書は、最初に80代の女性が認知症を発症することでどのような困難に直面するかを例示し、解決するための方策を提案しています。その中で筆者は、認知症になる前に自分の意思を残すことが心理学的にどのような意味があるのかについて考察しました。

科学技術の急速な進展を背景に、私たちは、生や死をめぐる意思決定を自らの責任で行うという新しい課題に直面しています。高齢期の意思決定には、その時の状況や個人の考え方だけでなく、家族や周囲の人との関係性も大きく影響します。生涯発達の視点から高齢者の意思決定のプロセスに目を向けると、意思決定をする高齢者と、高齢者に意思を問いかける人との、共感を通した意思の創出と、その意思の伝承というライフサイクルが連鎖するかかわり合いのダイナミズムが、多世代の発達の様相を示しているといえます。高齢者が社会の中で果たす役割が見えにくくなっている今日、高齢者自身と社会の双方が認めることのできる新しい高齢者の存在意義が必要とされています。意思決定を通じて、他の人に意思を伝える存在としての新しい高齢者の存在意義が見出される可能性を本著でのべています。

高齢化社会のおける新しい課題に医療や心理学がどのように取り組んでいるか是非手に取っていただければと思います。

著者より

お　知　ら　せ

同志社大学古本募金　同志社女子大学DWCLA古本募金
ご協力のお願い

かつて新島襄がグレイス教会で献金を訴えた際、多くの聴衆から多額の寄付の申し入れがありました。その中で、年老いた農夫と寡婦がそれぞれ手渡した2ドルは、殊更に彼の心を打ち、そしてこの2ドルこそが同志社の核となった、と新島は書き記しています。この時に集まった5000ドルの献金はもちろん、それと同時に、多くの人々から頂いた善意によって同志社は設立されました。

同志社大学・同志社女子大学では、「古本募金」プロジェクトを開始いたしました。古本募金とは、皆さまのお手元にある不要となった書籍等（CD・DVD・ゲームソフトを含む）の買取金額が大学に寄付される仕組みです。その寄付金は、同志社大学では学生の奨学金に、同志社女子大学では図書館の図書購入費用に充てられ、これからの社会を担う学生の未来に繋がります。2ドルの精神をお持ちの皆様からのご支援・ご協力を心よりお願い申し上げます。

期　　間：随時
寄 付 方 法：下記をご参照ください。
　　同志社大学（https://www.furuhon-bokin.jp/doshisha/）
　　同志社女子大学（https://www.furuhon-bokin.jp/dwc/）

寄付の流れ：
①まずは寄付者ご自身で本・CD・DVD・ゲームソフトの梱包をお願いいたします。
②各大学のウェブサイト（上記）からお申し込みください。
　宅配便の集荷日時を指定できますので、あとは集荷を待つだけです。
　※合計5冊（5点）から送料無料です※
③集荷を指定した日時に宅配業者がご指定場所まで取りに来ます。送り状もウェブサイトから申込いただいた内容を印刷して持ってきますので手間がかかりません。
④上記①～③の3ステップで手続き完了です。
　後日お手元に届く「寄付受領書」でご確認ください。

FLOW　古本募金の流れ

1. 本・CD・DVD・ゲームを梱包

合計5冊（5点）から送料無料

〉

2. 古本の集荷・仕分け・査定

VALUE BOOKS

〉

3. 買取金額の寄付

同志社大学 Doshisha University

同志社女子大学 Doshisha Women's College of Liberal Arts. Founded in 1876

お問い合わせ先：同志社大学　学生生活課
TEL：075-251-3280
E-mail：ji-kosei@mail.doshisha.ac.jp
同志社女子大学　図書館
京田辺キャンパス　TEL：0774-65-8481
今出川キャンパス　TEL：075-251-4145
E-mail：tosho-i@dwc.doshisha.ac.jp

ハリス理化学館同志社ギャラリー展示ご案内

ハリス理化学館同志社ギャラリーは、創立者新島襄の志と同志社の歴史等を、資料で紹介する展示施設です。ハリス理化学館は、J.N.ハリスの寄附をもとに1890（明治23）年に竣工し、長らく同志社における理化学教育の拠点となった建物です。現在、国の重要文化財に指定されています。

【常 設 展】ギャラリー内には６つの常設展示室が設けられています。１階には「新島襄の人と思想」、「同志社のあゆみ」、「世界の中の同志社」、「同志社の今」、２階には「J.N.ハリスと同志社」、「京都の中の同志社」と、部屋ごとにテーマがあり、創立以来の歴史と共に、京都や世界と共に歩んできた同志社の足跡をたどることができます。

【企 画 展】年３回程度開催される企画展は同志社に関わるテーマだけにとどまりません。新しい文化を発信する施設としてふさわしい企画展も適宜開催しています。

※常設展（２か月に１回程度の展示替え有）は随時開催中、企画展は詳細が決まり次第、ホームページでお知らせします。

【入 場 料】無料

【開館時間】10:00～17:00（最終入館16:30まで）

【閉 館 日】日曜日、月曜日、祝日、ゴールデンウィーク、夏期休暇中の一定期間、年末年始。ただし、企画展開催中は日曜日も開館します。

※開館日等を変更する場合があります。お越しになる前にホームページ等でご確認ください。

【場　　所】同志社大学　今出川キャンパス

※駐車場、駐輪場はありません。公共交通機関を利用してお越しください。

入場無料

お問い合わせ先
ハリス理化学館同志社ギャラリー事務室（日・月・祝日は閉室）
ホームページ：http://harris.doshisha.ac.jp/
TEL：075-251-2716　FAX：075-251-2736
E-mail：ji-harjm@mail.doshisha.ac.jp

新島旧邸公開のお知らせ

新島旧邸の敷地には、幕末まで京都大工頭中井家の屋敷があり、明治初年には中井屋敷を堂上華族の高松保実が所有していました。1875（明治８）年11月29日、新島襄は、この高松邸の半分を賃借して仮校舎とし、生徒８名で同志社英学校を開校しました。翌年、英学校は薩摩藩邸跡地の専用校舎に移りますが、その後、新島は高松邸を購入し、自宅を1878（明治11）年に建築しました。これが、現在の新島旧邸です。同志社発祥の地に建つ新島旧邸を、同志社の建学の理念を体感する場として公開します。

【公開期間】①通常公開
2019年10月８日～11月30日、2020年３月３日～31日
毎週　火・木・土曜日（祝日は除く）
②特別公開
10月１日～５日（秋の特別公開）
11月10日（ホームカミングデー）
11月29日（創立記念日）
2020年３月20日～22日（卒業式）
※公開日の詳細はHPをご覧ください。https://archives.doshisha.ac.jp
【公開時間】10:00～16:00（入館受付は15:30まで）
【見学対象】①通常公開
旧邸周囲から建物内部を見学（建物内部には入場できません）
②特別公開
旧邸周囲及び建物内部（母屋１階と附属屋）に入場できます。
※旧邸建物内に一度に入れる人数は20名程度とします。
【入 場 料】無料
【場　　所】京都市上京区寺町通丸太町上ル松蔭町
※駐車場、駐輪場はありません。公共交通機関を利用してお越しください。
【団体見学申込】10名以上の団体は、予約が必要です。団体予約は、見学日の１週間前までに電話・FAX・E-mailにて下記にお申し込みください（電話受付は10:00～16:30）。

入場無料

お問い合わせ先
ハリス理化学館同志社ギャラリー事務室（日・月・祝日は閉室）
TEL：075-251-2716　FAX：075-251-2736
E-mail：n-kyutei@mail.doshisha.ac.jp

同志社女子大学史料センター
第24回企画展

お　知　ら　せ

同志社女子教育と体育・スポーツ

３つの正三角形からなる同志社徽章は、知・徳・体の三位一体の教育理念の象徴であると言われています。同志社の女子教育の中でも、心身に健康をもたらすための教育は常に重視されてきました。それは、正課の授業に加えて、スポーツフェスティバルや課外活動など多面的に展開されています。今回の企画展では、本学の体育教育およびスポーツの歩みを振り返り、それが果たしてきた役割を見直していきます。

期　　間：2019年11月22日㈮～2020年7月31日㈮
時　　間：10:00～16:00
閉　室　日：土・日曜日、祝日（ただし、11月23日（土・祝）、24日㈰、2020年5月6日（水・振）、7月23日（木・祝）、24日（金・祝）を除く）
2019年11月29日㈮、12月25日㈬～2020年1月3日㈮、4月30日㈭、5月1日㈮
場　　所：同志社女子大学史料センター
（今出川キャンパスジェームズ館１階展示室）
主　　催：同志社女子大学

【公開講演会】
日　　時：2019年12月7日㈯13:00～14:00
演　　題：「同志社女子大学の建学理念と体育・スポーツ」
講　演　者：濱口義信氏（同志社女子大学名誉教授）
場　　所：同志社女子大学今出川キャンパスジェームズ館J207（予定）

同志社女学校でのなぎなたの稽古　　同志社社史資料センター提供

お問い合わせ：同志社女子大学史料センター
〒602-0893　京都市上京区今出川通寺町西入
TEL：075-251-4200　FAX：075-251-4201
E-mail：shiryo-i@dwc.doshisha.ac.jp

編集後記

本号の特集は「一貫教育探求センター始動」であり、２０１９年４月に発足した一貫教育探求センターについての座談会とシンポジウムを紹介している。

14の学校を擁する同志社では、一貫教育について法人全体で対応することが喫緊の課題とされている。小中高では、学習指導要領により全体的な方向転換が図られ、学力の三要素（知識・技能、思考力・判断力・表現力、主体性・協調性）が重視されたカリキュラムとなっている。しかしそれが大学への進学や大学における学びとどのように連携しているのかについては、まだ検討が不十分である。もともと同志社の教育において大切にされている「倜儻不羈」という言葉は、個性を尊重し、画一的でない総合的な教養人を育てようという意味であり、まさにこの学力の三要素が盛り込まれているといえ、法人の教育におけるその実現がもとめられているのである。

一貫教育探求センターでは、研修会や自主的研究会の支援、課外活動・スポーツ支援のサポートと充実、留学制度の検討、などのような具体的な支援を柱として、これまでにないユニークな取組みを導入していく方針である。現在開発が進められている電子ポートフォリオにより、個人の小学校から高校までの学びの記録が作成され、大学につなげることが計画されている。私見ではあるが、大学での留学などについて高校時代から情報提供や準備をはじめて、大学１・２回生の段階で実現するといった方法も可能ではないだろうか。幼小中高大の縦の連携、各学校間や分野間の横の連携を強化するための仕組みづくりの端緒としてのセンター発足ととらえ、より一層の協力を図るべきであろう。

今号も特集記事のみならず、多くの方々からの玉稿をいただいた。紙面を借りてお礼申し上げたい。春学期のお忙しい期間においての原稿の執筆、真にありがとうございました。

（青木）

●同志社広報委員会小委員会委員

ABC順・○印委員長

○大学商学部教授　青木　真美
大学経済学部准教授　本領　崇一
大学広報部広報課長　今西　覚
女子中学校・高等学校事務長　磯田　信行
大学広報部長　岩田　喬彦
女子大学学芸学部教授　影山　貴一
中学校・高等学校事務長　鎌田　伸四郎
大学法学部教授　川嶋　洋子
女子大学看護学部准教授　木村　浩行
国際中学校・高等学校事務長　貴志　佳楠
大学神学部助教　木谷　清子
女子大学表象文化学部教授　北尾キャスリーン
大学生命医科学部准教授　小林　耕太
大学スポーツ健康科学部助教　松倉　啓太
女子大学薬学部准教授　松元　加奈
幼稚園教諭　森田　清子
大学政策学部教授　中田　喜文
大学理工学部准教授　小武内清貴
大学心理学部准教授　及川　昌典
女子大学生活科学部教授　奥田　紫乃
女子大学現代社会学部教授　大西　秀之
大学グローバル地域文化学部教授　ROBERT JOHN CROSS
小学校事務長　齋藤　道子
大学文化情報学部助教　田中　雄
法人事務部校友同窓課長　田中　裕一
大学グローバル・コミュニケーション学部助教　唐　顥芸
国際学院事務長　谷口　隆秀
大学文学部助教　塚田　雄一
香里中学校・高等学校事務長　内山　一栄
大学社会学部教授　浦坂　純子
女子大学広報部広報室広報課長　渡邉　一郎
法人事務部長　柳井　望

●編集協力　アルカダッシュ

●同志社時報の申し込み

・送料（ゆうメール着払い：１冊236円）のみのご負担でご講読いただけます。
・お申し込みは、綴じ込みハガキをご利用ください。
・宛先　〒602-8580 京都市上京区今出川通烏丸東入 同志社大学広報課

同志社時報　第148号
編集人　青木真美
発行人　八田英二
発行　学校法人同志社
同志社大学広報課同志社時報係
電話（075）251－3120
印刷所　株式会社 石田大成社
２０１９年１０月１日発行

切り取り線

切り取り線

お手数ですが
63円切手を
お貼りください。

6 0 2 - 8 5 8 0

京都市上京区今出川通烏丸東入

同志社大学広報課　同志社時報係　行

切り取り線

（ふりがな） お名前	
ご住所	〒　　－ 電話（　　）　　－
いずれかに○をつけて下さい。 校友　・　同窓　・　父母　・　一般　・　教職員 （同志社　　学校　　年卒業）	

本誌送付ご希望の方は、下記のいずれかに○をおつけください。

●新規希望（購読申請書をお送りいたします）

●バックナンバーをご希望の方は、号、発行年月をお書きください。　　号（　　年　　月発行）

※新規読者をご紹介いただける場合は、裏面を使ってご紹介者の連絡先をお知らせください。見本誌をお送りします。

同志社教育の目的は、その神学、政治、文学、
科学等に従事するにかかわらず、みな精神、
活力あり、真誠の自由を愛し、もって邦家に尽
すべき人物を養成するを務めべきこと。

新島襄の遺言より

しおり　切り取り線

切り取り線

切り取り線

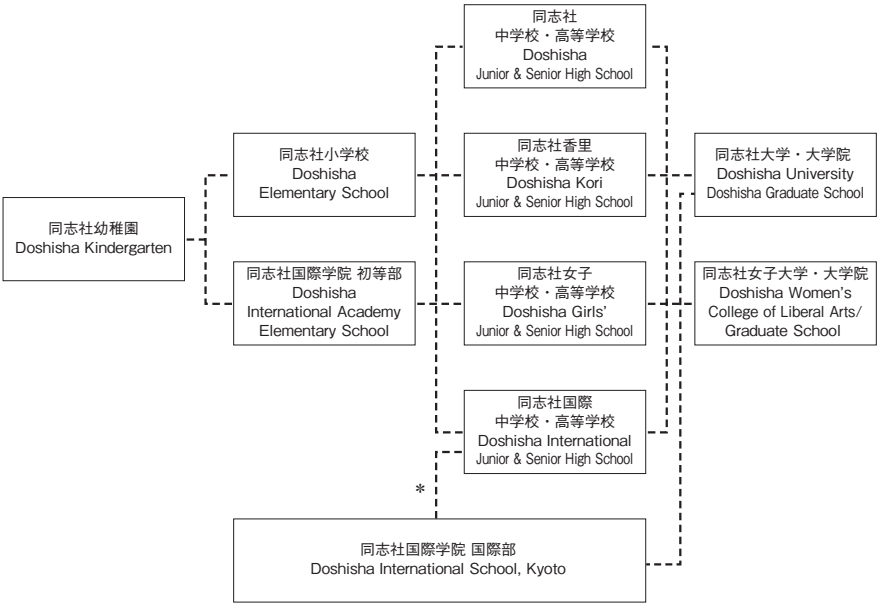
『同志社時報』に関するご意見・ご感想をお寄せください。

Doshisha college song　Words by W. M. Vories　Music by Carl Wilhelm

One purpose, Doshisha, thy name	同志社よ、その名は一つの目的を意味する。
Doth signify; one lofty aim:	その学徒の精神的、肉体的に、
To train thy sons in heart and hand	神のため、祖国のため、生きんという
To live for God and Native Land.	一つの崇高な目的を。
Dear Alma Mater, sons of thine	親愛なる母校よ、同志社の学徒は、
Shall be as branches to the vine;	ぶどうの枝のごとくつながりゆくことであろう。
Tho' through the world	たとえ、世界くまなく、広くはるかに、
we wander far and wide,	われらさまようとも、汝の教訓は、
Still in our hearts thy precepts shall abide!	われわれの心に永遠に生き続けるであろう。

（訳：児玉　実英）

同志社の一貫教育体制
The Integrated Educational System of the Doshisha



＊一定の条件があります（帰国生の要件）

DOSHISHA

同志社時報

第148号 2019年10月発行

ISSN 0389-3111